

# 邪宗門

北原白秋

青空文庫



## 父上に献ぐ

父上、父上ははじめ望み給はざりしかども、児は遂にその生れた  
るところにあこがれて、わかき日をかくは歌ひつづけ候ひぬ。も  
はやもはや咎め給はざるべし。

## 邪宗門扉銘

ここ過ぎてメロデア曲節の悩みのむれに、

ここ過ぎて官能の愉樂のそのに、

ここ過ぎて神経のにがき魔睡に。

詩の生命は暗示にして単なる事象の説明には非ず。かの筆にも言語にも言ひ尽し難き情趣の限なき振動のうちに幽かなる心靈の歎をたづね、縹渺たる音楽の愉楽に憧がれて自己観想の悲哀に誇る、これわが象徴の本旨に非ずや。されば我らは神秘を尚び、夢幻を歎び、そが腐爛したる頽唐の紅を慕ふ。哀れ、我ら近代邪宗門の徒が夢寢にも忘れ難きは青白き月光のもとに歎歎く大理石の嗟嘆也。暗紅にうち濁りたる埃及の濃霧に苦しめるスフィンクスの瞳也。あるはまた落日のなかに笑へるロマンチツシユの音楽と幼児磔殺の前後に起る心状の悲しき叫也。かの黄臘の腐れたる絶間なき瘡癩と、オオロンの三の絃を擦る嗅覚と、曇硝子にうち噎

ぶウキスキイの鋭き神経と、人間の脳髓の色したる毒艸の匂深き  
ためいきと、官能の魔睡の中に疲れ歌ふ鶯の哀愁もさることなが  
ら、仄かなる角笛の音に逃れ入る緋の天鷲絨の手触の棄て難さよ。

昔むかしよりいまに渡わたり来くる黒船くろふね縁えんがつくれれば鱻ふかの餌えとなる。サンタ  
マリヤ。

『長崎ぶり』





## 例言

一、本集に収めたる六章約百二十篇の詩は明治三十九年の四月より同四十一年の臘月に至る、即最近三年間の所作にして、集中の大半は殆昨一年の努力に成る。就中『古酒』中の「よひやみ」「柑子」「晚秋」の類最も旧くして『魔睡』中に載せたる「室内庭園」「曇日」の二篇はその最も新しきものなり。

一、予が真に詩を知り初めたるは僅に此の二三年の事に属す。されば此の間の前後に作られたる種々の傾向の詩は皆予が初期の試作たるを免れず。従て本集の編纂に際しては特に自信ある代

表作物のみを精査し、少年時の長篇五六及其後の新旧作七十篇の余は遺憾なく割愛したり。この外百篇に近き『断章』と『思出』五十篇の著作あれども、紙数の制限上、これらは他の新しき機会を待ちて出版するの已むなきに到れり。

一、予が象徴詩は情緒の諧楽と感覺の印象とを主とす。故に、凡て予が扱ふ所は僅かなれども生れて享け得たる自己の感覺と刺戟苦き神経の悦楽とにして、かの初めより情感の妙なる震慄を無みし只冷かなる思想の概念を求めて強ひて詩を作為するが如きを嫌忌す。されば予が詩を読まむとする人にして、之に理知の闡明を尋ね幻想なき思想の骨格を求めむとするは謬れり。要するに予が最近の傾向はかの内部生活の幽かなる振動のリズム

を感じその儘の調律に奏でいんとする音楽的象徴を専とするが故に、それが表白の方法に於ても概ねかの新しき自由詩の形式を用ゐたり。

一、或人の如きは此の如き詩を嗤ひて甚しき跨張と云ひ、架空なる空想を歌ふものと做せども、予が幻覚には自ら真に感じたる官能の根抵あり。且、人の天分にはそれぞれ自らなる相違あり、強ひて自己の感覚を尺度として他を律するは謬なるべし。

一、本来、詩は論ふべききはのものにはあらず。嘗て幾多の譏笑と非議と謂れなき誤解とを蒙りたるにも拘らず、予の単に創作にのみ執して、一語もこれに答ふる所なかりしは、些か自己の所信に安じたればなり。

一、終に、現時の予は文芸上の如何なる結社にも与らず、又、如何なる党派の力をも恃む所なき事を明にす。要は只これらの羈絆と掣肘とを放れて、予は予が独自なる個性の印象に奔放なる可く、自由ならんことを欲するものなり。

一、尚、本集を世に公にする事を得たる所以のものは、これ一に蒲原有明、鈴木鼓村両氏の深厚なる同情に依る、ここに謹謝す。

明治四十二年一月

著者識

## 魔睡

余は内部の世界を熟視めて居る。陰鬱な死の節奏は絶えず快く響き渡る……と神経は一斉に不思議の舞踏をはじめ。すすりなく黒き薔薇、歌うたふ硝子のインキ壺、誘惑の色あざやかな猫眼石の腕環、笑ひつづける空眼の老女等はこまかくしなやかな舞踏をいつまでもつづける。余は一心に熟視めて居る……いつか余は朱の房のついた長い剣となつて渠等の内に舞踏つてゐる……

長田秀雄

## 邪宗門秘曲

われは思ふ、末世まつせの邪宗じやしゆう、切支丹きりしたんでうすの魔法まはふ。  
 黒船くろふねの加比丹かひたんを、紅毛こうまうの不可思議国ふかしぎこくを、  
 色赤いろあかきびいどろを、匂銳におへどきあんじやべいいる、  
 南蛮なんばんの棧留縞さんとめじまを、はた、阿刺吉あらしき、珍醜ちんたの酒を。

目見まみ青きドミニカびとは陀羅尼誦だらにずし夢にも語る、  
 禁制きんせいの宗門神しゆうもんしんを、あるはまた、血くろすに染む聖磔くろす、  
 芥子粒けしつぶを林檎りんごのごとく見すといふ欺罔けれんの器うつは、

波羅韋僧はらいその空そらをも覗のぞく伸び縮むちぢむ奇きなる眼鏡めがねを。

屋いへはまた石もて造り、大理石なめいしの白ちしほき血潮ちしほは、  
 ぎやまんの壺つぼに盛もられて夜よとなれば火点ともるといふ。  
 かはの美えしき越え歴機れきの夢むは天鵝絨びろうどの薰くゆりにまじり、  
 珍めづらなる月つきの世界せかいの鳥とり獣けもの映像うつつすと聞きけり。

あるは聞きく、化粧けはひの料しろは毒どくさう草くさうの花はなよりしほり、  
 腐くされたる石いしの油あぶらに画ゑがくてふ麻利耶まりやの像ざうよ、  
 はた羅甸らてん、波爾杜瓦爾ほるとがるらの横よこつづり青あおなる仮名かなは  
 美うつくしき、さいへ悲かなしき歡くわんらん樂らくの音ねにかも満みつる。

いざさらばわれらに賜へ、たま幻惑げんわくの伴天連尊ばてれんそんじや者、  
 百年もくとせを刹那せつなに縮め、ちぢ血はりきの磔はりき脊せきにし死すとも  
 惜をしからじ、願ねがふは極秘ごくひ、かの奇くしき紅くれなゐの夢、  
 善主磨ぜんすまろ、今日けふを祈いのに身みも靈たまも薰くゆりこがるる。

## 室内庭園

晩春おそはるの室むろの内うち、

四十一年八月



暮れなやみ、暮れなやみ、噴水ふきあげの水はしたたる……

そのもとにあまりりす赤あかくほのめき、

やはらかにちらぼへるへリオトロオブ。

わかき日のなまめきのそのほめき静しづこころなし。

つ 尽つきせざる噴水ふきあげよ……

黄きなる実みの熟うるる草、奇異きゐの香木かうぼく、

その空にはるかなる硝子がらすの青み、

外ぐわい光くわうのそのなごり、鳴ける鶯うぐひす、

わかき日の薄暮くれがたのそのしらべ静しづこころなし。

いま、黒くろき天鵝びろうど絨じゆの

にほひ、ゆめ、その感さはり触ふきあげ………噴ふきあげ水もつに纏もつれたゆたひ、

うち湿しめる革かはの函はこ、饅すゆる褐かちいろ色

その空くうきに暮といきれもかかる空くうき氣といきの吐といき息………

わかき日のその夢かの香かの腐ふし蝕よくしづ静きざこころなし。

三さん層かいの隅すみか、さは

腐くされたる黄わう金こんの縁ふちの中うち、自鳴とけい鐘きざの刻きざみ………

ものなべて悩なやましき、盲しひし少女をとめの

あたたかに匂にほひふかき感かん覚かくのゆめ、

わかき日のその靄ねに音ひびは響ひびく、静しづこころなし。

おそはる  
晩春の室の内、  
むろうち

暮れなやみ、暮れなやみ、噴水の水はしたたる……

そのもとにあまりりす赤くほのめき、

甘く、またちらほひぬ、ヘリオトロオブ。

わかき日は暮るれども夢はなほ静ころなし。

四十一年十二月

## 陰影の瞳

ゆふべ  
夕となればかの思曇硝子をぬけいでて、  
おもひもりがらす

廃れし園すたのなほ甘あまきときめきの香かに顫ふるへつつ、  
 はや饅すえ萎なゆる芙蓉ふようくわ花くさの腐くされの紅あかきものかげと、  
 纏もつれてやまぬ秦とねりこ皮この陰いんえい影いにこそひそみしか。

如何いかに呼よべども静しづまらぬ瞳ひとみに絶たえず涙なみだして、  
 帰かへるともせず、密ひそやかに、はた、果はてしなく見み入りぬる。  
 そこともわかぬ森メランコリアかげの鬱うすやみ憂うの薄うす闇やみに、  
 ほのかにのこる噴ふきあげ水みづの青あおきひとすぢ……

四十一年十月

## 赤き僧正

邪じやしゆう宗しゆうの僧そうぞ彷徨さまよへる……瞳す据すゑつつ、

黄たそがれ昏やくさうゑんの薬ぐわいくわう草園くわいくわうの外ぐわいくわう光くわいくわうに浮うきいでながら、

赤あか々と毒どくのほめきの恐おそれ怖おそれして、顛ふるひ戦をのく

陰いんえい影えいのそこはかとなきおぼろめき

まへに、うしろに……さはあれど、月の光の

水みの面もなる葦あしのわか芽めに顛ふるふ時。

あるは、靄をちかたふる遠をちかた方かたの窓がらすの硝子がらすに

ほの青むせきソロのピアノの咽むせぶ時。

瞳す据すゑつつ身動みじろかず、長そうき僧服そう

爛壞らんゑする 暗紅あんこう色しよくのにほひしてただ暮れなやむ。

さて在るは、曩さきに吸すひたる

Hachisch 《ハシツシユ》の毒どくのめぐりを待てるにか、

あるは劇はげしき 歡くわん樂らくの後の魔睡まするや忍しのぶらむ。

手に持もつは黒くろき梟う

爛らん々くと眼めは光る……

……そのすそに蟋蟀こほろぎの啼なぐ……

四十一年十二月

## WHISKY.

夕暮ゆふぐれのものあかき空そら、

その空そらに百舌啼もずなきしきる。

Whisky 《ウイスキー》の罍びんの列れつ

冷ひややかに拭ふく少女をとめ、

見よ、あかき夕暮ゆふぐれの空そら、

その空そらに百舌啼もずなきしきる。

四十一年十一月

## 天鵝絨のにほひ

やはらかに腐れつつゆく暗やみの室むろ。

その片隅かたすみの薄うすあかり、背そびらにうけて

天鵝絨びろうどの赤あかきふくらみうちかつぎ、

にほふともなく在あるとなく、蹲うづくみ居れば。

暮れてゆく夏の思と、日向葵ひぐるまの

凋しをれの甘かき香かもぞする。……ああ見まもれど

おもむろに悩なやみまじろふ色の陰影かげ



それともわかね……  
 熱病ねつびやうの闇のをのき……

Hachisch 《ハシツシユ》か、酔すか、茴香酒アブサンか、くるほしく  
 溺おぼれしあとの日の疲労つかれ……縛もつれちらぼふ  
 Wagner 《ワグネル》の恋慕れんぼの楽がくの音ねのゆらぎ  
 耳かたぶけてうち透すかし、在ありは在あれども。

それらみな素足すあしのもとのくらがりに  
 爛壞らんゑの光放はなつとき、そのかなしみの  
 腐くされたる曲きの緑よみどりを如何いかにせむ。  
 君を思ふとのたまひしゆめの言葉ことばも。

わかき日の赤あかきなやみに織りいでし  
 にほひ、いろ、ゆめ、おぼろかに嗅かぐとなけれど、  
 ものやはに暮れもかぬれば、わがこころ  
 天鵝絨びろうど深くひきかつぎ、今日けふも涙す。

四十一年十二月

濃霧

濃霧のうむはそそぐ……腐くされたる大理だいりの石の

なま  
生くさく吐息するかと蒸し暑く、

はた、冷やかに官能の疲れし光――

月はなほ夜の氛囲気の朧なる恐怖に懸る。

のうむ  
濃霧はそそぐ……そこに虫の神経

と  
鋭く、甘く、圧しつぶさるる嗟嘆して

飛びもあへなく耽溺のくるひにぞ入る。

薄ら闇、盲啞の院の角硝子暗くかがやく。

のうむ  
濃霧はそそぐ……さながらに戦く窓は

アラビヤ魔法の館の薄笑。

麻痺薬しびれぐすりの酸すゆき香かに日ひねもす噎むせて

聾ろうしたる、はた、盲めしひたる円頂閣まるやねか、壁かべの中ちゆうふう風ふう。

濃霧のうむはそそぐ……甘あまく、また、重おもく、くるしく、

いづくにか凋しをれし花はなの息いきづまり、

苑そののあたりあたりの泥ぬ濘かるみに落ちおちし燕つばや、

月つきの色いろ半死はんしの生しやうに悩なやむごとただかき曇くもる。

濃霧のうむはそそぐ……いつしかに虫むしも盲めしひつつ

聾ろうしたる光ひかりのそこそこにうち痺しびれ、

啞おうしとぞなる。そのときときにひとつひとつの硝子がらす

幽魂いうこんの如ごとくに青くおぼろめき、ピアノ鳴りいづ。

濃霧のうむはそそぐ……数かずの、見よ、人かげうごき、

閑ふくる夜の恐怖おそれか、痛いたきわななきに

ただかいさぐる手のさばき——靈たまの彈奏だんそう、

盲目めしひ弾ひき、啞おうしと聾ろうじやつぶ者め円かきら眼のぞに重かさなり覗のぞく。

濃霧のうむはそそぐ……声もなき声の密語みつごや。

官能くわんのうの疲つかれにまじるすすりなき

靈たまの震慄おびえの音ねも甘ろうく聾ろうしゆきつつ、

ちかき野のどしに喉絞のどしめらるる淫たはれ女めのゆるき痙攣けいれん。

濃霧のうむはそそぐ……香かの腐蝕ふしよく、肉にくの衰頹すゐたい、  
 呼吸いき深く、囉仿コロロホルム護吸まひ入るる  
 朧ろうたる暑あつき夜よの魔睡ますみ……重おもく、いみじく、  
 音おともなき盲啞まうあの院ゐんの氛ふん囀るきに月つきはしたたる。

赤き花の魔睡

日ひは真昼まひる、ものあたたかに光エエテル素ルの

四十一年十月

波動は甘く、また、緩るく、戸に照りかへす、

その濁る硝子のなかに音もなく、

コロロホルム

囉防護香ぞ滴る……毒の※言……

遠くきく、電車のきしり……

……棄てられし水薬のゆめ……

やはらかき猫の柔毛と、蹠の

ふくらのしろみ悩ましく過ぎゆく時よ。

窓の下、生の痛苦に只赤く戦ぎえたてぬ草の花

亜鉛の管の

湿りたる筧のすそに……いまし魔睡す……

## 麦の香

嬰兒泣く……麦の香の湿るあなたに、

続け泣く……やはらかに、なやましげにも、

香に噎び、香に噎び、あはれまた、嬰兒泣きたつ……

夏の雨さと降り過ぎて

新にもかをり蒸す野の畑いくつ湿るあなたに、

四十一年十二月



赤き衣きぬひと一きは若く、にほやかにけぶる揺籃ゆりごや、  
 すりがらす磨硝子すりガラス、あるは窓枠まどわく、濡れ濡ぬぬれて夕日ゆふひさしそふ。

四十一年十二月

## 曇日

曇くもりび日の空気くうきのなかに、  
 狂くるひいづる樟くすの芽めの鬱メランコリアコリア 憂きりよ……  
 そのもとに桐きりは咲く。

Whisky 《ウイスキー》の香かのごときしづき、かなしみ……

そこここにいぎたなき駱駝らくだの寢息ねいき、  
 見よ、鈍にぶき綿めん羊やうの色のよごれに  
 饘すえて病やむ藁わらのくさみ、  
 その湿しめる泥ぬ滓かるみに花はこぼれて  
 紫むらさきの薄うすき色いろ鋭とどになげく……  
 はた、空そらのわか葉はの威ゐ圧あつ。

いづこにか、またもきけかし。  
 餌えに饑うゑしベリガンのけうとき叫さけび、  
 山やま猫ねこのものさやぎ、なげく鶯うぐひす、

腐れゆく沼の水蒸すがごとくに。

そのなかに桐は散る…… Whisky 《ウイスキー》の強きかなしみ

……

もの甘き風のまた生あたたかさ、

猥らなる獣らの囿内のあゆみ、

のろのろと枝に下るなまけもの、あるは、貧しく  
眼を据ゑて毛虫啄む嗟歎のほろほろ鳥よ。

そのもとに花はちる…… 桐のむらさき……

かくしてや日は暮れむ、ああひと日。  
 病院を逃れ来し患者の恐怖、  
 赤子らの眼のなやみ、笑ふ黒奴  
 酔ひ痴れし遊蕩児の縦覧のとりとめもなく。

その空に桐はちる……新しきしぶき、かなしみ……

はたや、また、園の外ゆく

軍楽の黒き不安の壊れ落ち、夜に入る時よ、  
 やるせなく騒ぎいでぬる鳥獣。

また、その中に、  
なかに  
 狂くるひいづる北ほつき極よく熊ぐまの氷こなす戦をの慄のきのこゑ声。

その闇やみに花ははちる……Whisky 《ウイスキー》の香かの頻しづき吹……桐  
 紫……

## 秋の瞳

晩おそ秋あきの濡ぬれにたる鉄て柵すりのうへに、

四十一年十二月

黄<sup>き</sup>なる葉の河やなぎほつれてなげく

やはらかに葬<sup>はうむり</sup>送のうれひかなでて、

過ぎゆきし Trombone 《トロムボオン》 いづちいにけむ。

はやも見よ、暮れはてし吊<sup>つり</sup>橋<sup>ばし</sup>のすそ、

瓦<sup>が</sup>斯<sup>す</sup>点<sup>と</sup>る……いぎたなき馬<sup>ま</sup>の吐<sup>と</sup>息<sup>いき</sup>や、

騒<sup>さわ</sup>ぎやみし曲<sup>ちや</sup>馬<sup>り</sup>師<sup>ねし</sup>の樂<sup>が</sup>屋<sup>くや</sup>なる幕<sup>まく</sup>の青<sup>あお</sup>みを

ほのかにも掲<sup>か</sup>げつつ、水<sup>み</sup>の面<sup>も</sup>見る女<sup>をんな</sup>の瞳<sup>ひとみ</sup>

四十一年十二月

## 空に真赤な

空そらに真まっか赤かな雲くものいろ。  
 玻璃はりに真まっか赤かな酒さけのいろ。  
 なんでこの身みが悲かなしかろ。  
 空そらに真まっか赤かな雲くものいろ。

## 秋のをはり

四十一年五月

腐くされたる林檎りんごのいろに

なほ青あをきにほひちらほひ、

水すゐ薬やくの汚しみし卓つくに

瓦が斯焜すこんろ炉ろほのかに燃もゆる。

病やまうど人は肌はだををさめて

愁うれはしくさしぐむごとし。

何なぞ湿しめる、医いき局よくのゆふべ、

見みよ、ほめく劇げき薬やくもあり。

色いろ冴さえぬ室むろにはあれど、



声こゑたててほのかに燃もゆる  
 瓦斯がす焔こんろ炉………空そらと、こころと、  
 硝子戸がらすどに鈍にばむさびしさ。

しかはあれど、寒さむきほのほに  
 黄きの入いり日ひさしそふみぎり、  
 朽くちはてし秋あきの井い才さいロんン  
 ほそぼそとうめきたてぬる。

四十一年十二月

## 十月の顔

顔なほ赤し……うち曇り黄ばめる夕、

『十月』は熱を病みしか、疲れしか、

濁れる河岸の磨硝子脊に凭りかかり、

霧の中、入日のあとの河の面をただうち眺む。

そことなき權のうれひの音の刻み……

涙のしづく……頬にもまたゆるきなげきや……

ややありて麩包の破片を手にも取り、

さは冷やかに嘔みしめて、来るべき日の  
 味もなき悲しきゆめをおもふとき……

なほもまた廉き石油の香に噎び、  
 腐れちらほふ骸炭に足も汚ごれて、  
 小蒸汽の灰ばみ過ぎし船腹に  
 一きは赤く輝やきしかの窓枠を忍ぶとき……

月光ははやもさめざめ……涙さめざめ……  
 十月の暮れし片頬を

ほのかにもうつしいだしぬ。

接吻の時

薄<sup>くれがた</sup>暮か、

日のあさあけか、

昼か、はた、

ゆめの夜<sup>よは</sup>半にか。

そはえもわかね、

燃<sup>も</sup>えわたる若<sup>い</sup>き命<sup>のち</sup>の眩<sup>めくる</sup>暈<sup>めき</sup>、

四十一年十二月

赤き震慄おびえの接吻くちつけにひたと身顛みふるふ一刹いつせつ那な。

あな、見よ、青き大月たいげつは西よりのぼり、

あなや、また瘡病ぎやうやむ終はての顛ふるひして

東へ落つる日の光、

大おほぞらに星はなげかひ、

青く盲めしひし水面みのもには薬香くすりかにほふ。

あはれ、また、わが立つ野辺のべの草は皆色も干乾ひからび、

折り伏せる人の骸かばねの夜よのうめき、

人靈色ひとだまいろの

木の列れつは、あなや、わが挽歌ひきうたうたふ。

かくて、はや落穂おちほひろひの農人のうにんが寒き瞳よ。

歓楽よろこびの穂のひとつだに残のこさじと、

はた、刈り入るる鎌の刃はの痛いたき光よ。

野のすゑに獣けものらわらひ、

血すに饅きしやえて汽車鳴き過すぐる。

あなあはれ、あなあはれ、

ふたりふたりがほかの靈たましひのありとあらゆるその呪咀のろひ。

あさあけ  
朝明か、

死の薄暮くれがたか、

昼か、なほ生あれもせぬ日か、

はた、いづれともあらばあれ。

われら知る赤くちびるき唇。

## 濁江の空

腐くされたる林檎りんごの如き日のにほひ

四十一年六月

まろ  
円らに、さあれ、光なく甘げあまに沈む

おそはる  
晩春にこおもの濁重たき靄うちの内、

ふと、カキ色いろの軽気球けいききうくだるけはひす。

をちかた  
遠方くもの曇れる都市としの屋根やねの色

たゆげあふに仰ぐ人はいま鈍にぶくもきかむ、

濁江にこりえのねぶたき、あるは、やや赤あかき

にほひの空のいづこにか洩もるる鉄てつの音ね。

なやましき、さは江えの泥どろの沈澱おどみより

あかるともなき灰くわいこう 紅こうの帆ほのふくらみに



つた  
伝へくるもぐりのひと潜水夫が作業さげふにか、  
す  
饅といきえたる吐息そこはかと水面みのもに黄きばむ。

かし  
河岸ものみになほ物見る子らはうづくまり、  
はや倦うましげににんぎやう人形をそが手に泣かす。  
ひくれ  
日暮いりひどき、入日に濁もやる靄うちの内、  
また、ふくらかに軽けいききう気球くだるけはひす。

魔国のたそがれ

四十一年八月

うち曇るくも 暗紅色あんこうしよく の大日おほの  
 魔法まはふの国くにに病やましげの笑ゑみして入れば、  
 もの甘あまき驢馬ろばの鳴なく音ねにもよほされ、  
 このもかのもとに悩なやましき吐息といきぞおこる。

そのかみの激はげしき夢しゆや忍しのぶらむ。  
 鬱黄うこんの百合ゆりは血ちににじむ眸ひとみをつぶり、  
 人間にんげんの声こゑして挑いどみ、飛とびかはし  
 鸚鵡あうむの鳥とりはかなしげに翅つばさふるはず。

草も木もかの誘惑いざなひに化なされつる

旅のわかうど、暮れ行けば心ひまなく

えもわかぬ毒どくの怨言かごとになやまされ、

われと悲しきくわんらく歡くわんらく樂おそに怕おそれて顫ふるふ。

日は沈み、たそがれどきの空そらの色

青き魔薬まやくの薰かをりして古ふるりつつゆけば、

ほのかにも誘さそはれ来る隊商カラバンの

鈴鳴すずる……あはれ、今日けふもまた恐怖おそれの予報しらせ。

はとばかり黙つぐみ戦をのくもの息いき。

いろびろうど  
色天鵝絨を擦るすごとき裳裾もすそのほかは  
声もなく甘く重おもたき靄もやの闇やみ、  
はやも王女わうぢよの領しらすべき夜よとこそなりぬ。

## 蜜の室

くれがた  
薄暮うるの潤うるみにごれる室むろの内うち、  
甘くも腐くさる百合ゆりの蜜みつ、はた、靄もやぼかし  
色赤きいんくの罎びんのかたちして

四十一年八月

ひそかに点<sup>とも</sup>る豆らんぶ息<sup>いき</sup>づみ曇る。

『豊<sup>とよくに</sup>国』のぼやけし似<sup>にがほなま</sup>顔生ぬるく、  
曇<sup>くもりがらす</sup>硝子の窓のそと外<sup>ぐわいくわう</sup>光なやむ。

ものの本<sup>ほん</sup>、あるはちらほふ日のなげき、  
暮れもなやめる<sup>たましひきんじ</sup>霊の金字のほひ。

接<sup>くちつけ</sup>吻の長<sup>なが</sup>き甘さに倦<sup>あ</sup>きぬらむ。

そと手をほどき靄<sup>うち</sup>の内さぐる心<sup>こゝち</sup>地に、

色<sup>しきまう</sup>盲<sup>ひとみをんな</sup>の瞳の女うらまどひ、

病<sup>や</sup>めるペリガンいま遠<sup>しめぢ</sup>き湿地になげく。

かかるとき、おぼめき摩なする Violon 《オオロン》の  
 なやみの絃いとの手触てきはりのにはひの重おもさ。  
 鈍にぶき毛けの絨じゆうたん 氈たんに甘みつき蜜やみの闇  
 澱おどみ饅すえつつ……血のごともらんぷは消ゆる。

## 酒と煙草に

酒さけと煙草たばこにうつとりと、

四十一年八月

倦<sup>う</sup>めるところを見まもれば、

それとしもなき<sup>たま</sup>霊のいろ

曇<sup>くも</sup>りながらに泣きいづる。

なにか嘆<sup>なげ</sup>かむ、うきうきと、

三味<sup>しやみ</sup>に燥<sup>はし</sup>やぐわがこころ。

なにか嘆<sup>なげ</sup>かむ、さいへ、また

霊<sup>たま</sup>はしくしく泣きいづる。

四十一年五月

## 鈴の音

日は赤し、窓の上まどへに恐怖おそれの鳥からす

ひた黙つぐみ暮れかかる砂漠さばくを熟視みつむ。

今けふ日もまたもの鈍にぶき駱駝らくだをつらね、

一ひとむれ群むれのわがやから消きえさりゆきぬ。

もの甘き鈴おとの音、ああそを聴きけよ。

からら、からら、ら、ら、ら……

暮くれのこるピラミドの暗あん紅こう色しよくよ。



そが空のうち濁る重き空気よ。

いづこにか月の色ほのめくごとし。

からら、からら、ら、ら、ら……

かの群よ、靄ふかく、いまかひろぐる

色鈍き、幽鬱の毛織の天幕。

駱駝らのためいきもそこはかとなく。

からら、からら、ら、ら、ら……

もの青く暮れてみな蒸しも見わかね。

饘え温るむ空のをち、薄らあかりに、

ほのかにも此方こなた見るスフィンクスの瞳。

からら、からら、ら、ら、ら……

あはれ、その静しづかなるスフィンクスの瞳。

ああ暗示あんじ……えもわかぬ夢の象徴シムボル。

またくいま埃えいぶと及よの夜とやなるらむ。

からら、からら、ら、ら、ら……

烏いまはたはたと遠く飛び去り、

窓まどにただ色あかき燈とも火点しびともる。

## 夢の奥

ほのかにもやはらかきにほひの園生。そのふ

あはれ、そのゆめの奥。おく日と夜のあはひ。

薄うすあかる空の色ひそかに顛ふるひ

暮れもゆくそのしばし、声なく立てる

真ましろ白なる大理石なめいしの男をとこの像がた、

微妙いみじくもまた貴あてに瞑目めつぶりながら

清きよらなる面おもの色かすかにゆめむ。

ものなべてきは妙たへをみなめに女の眼めざし

あはれそが夢ふかき空そらいろ色しつつ、

にほやかになやましの思おもひはうるむ。

そがなかに埋うもれたる素馨そけいのなげき、

蒸むし甘ちんてうき沈ちんてう丁のあるは刺させども

なにほどの香かの痛いたみ身にしおぼえむ。

わかうどは声もなし、清きよく、かなしく。

薄暮たそがれにせきもあへぬ女をんなの吐息といき

あはれその愁うれひな如し、しぶく噴ふきあげ水

そことなう節ふしゆるうゆらゆるなべに、

いつしかとほのめきぬ月の光も。

その空に、その苑そのに、ほのの青みに

静かなる 歎すすりなき 戯 泣きもいでつつ、

いづくにか、さまだるる愛慕あいぼのなげき。

やはらかきほの熱ほてる女の足音あのと

あはれそのほめき如なし、燃もえも生あれゆく

ゆめにほふ心しんのん 音のうつつなきかな。

大理石なめいしの身の白しろみ、面おももほのかに、

ひらきゆくその眼めざし、なかば閉ぢつつ、

ゆめのごと空仰あふぎ、いまぞ見惚みほるる。

色わかき夜よるの星、うるむ紅くれなゐ。

四十一年七月

窓

かかる窓ありとも知らず、昨日きのふまで過ぎすし河岸かはきし。  
今日けふは見よ、

色赤き花に日の照り、かなしくも依依ええてる児こ匂におふ。

あはれまた病やめる Piano 《ピアノ》 も……

四十一年九月

## 昨日と今日と

わかうどのせはしきよ。

さは昨日<sup>きのふ</sup>世をも厭ひて重格魯密母<sup>ぢゆうくろラムと</sup>求めも泣きしか、

今朝<sup>けさ</sup>ははや林檎<sup>きん</sup>吸ひつつ霧深き<sup>き</sup>河岸路<sup>かしぢ</sup>を辿る。

歌樂し、鳴らす木履<sup>きぐつ</sup>に……

四十一年十一月

## わかき日

『かくまでも、かくまでも、

わかうどは悲しかるにや。』

『さなり、女、をみな

わかき日には、

ましてまた才さいある身には。』

四十一年十一月



## 朱の伴奏

凡て情緒也。静かなる精舎の庭にほのめきいでて紅の戦慄に盲ひたる中オロンの響はわが内心の旋律にして、赤き絶叫のなかにほのかに啼けるこほろぎの音はこれ亦わが情緒の一絃によりて密かに奏でらるる愁也。なげかひ也。その他おほむね之に倣ふ。

## 謀坂

ひと日、わが精舎しやうじやの庭にはに、

晩秋おそあきの静かなる落日いりひのなかに、

あはれ、また、薄黄うすぎなる噴水ふきあげの吐息といきのなかに、

いとほのにオオロンの、その絃いとの、

その夢の、哀愁かなしみの、いとほのにうれひ泣なく。

蠟らふの火と懺悔ざんげのくゆり

ほのぼのと、廊らういづる白こももき衣は

夕暮ゆふぐれに言ものもなき修道女しうだうめの長ひとつらき一列。

さあれ、いま、中オロンの、くるしみの、

刺さすがごと火の酒の、その絃いとのいたみ泣く。

またあれば落日いりひの色いろに、

夢燃もゆる、噴ふきあげ水の吐息といきのなかに、

さらになほ歌もなき白鳥しらとりの愁うれひのもとに、

いと強せうやくき硝葉せうやくの、黒くろき火の、

地の底みちびやの導火みちびや燬やき、中オロンぞ狂くるひ泣く。

跳をどり来くる車しやりやう輻やうの響ひびき、

毒どくの弾丸たま、血ちの烟けむり、閃ひらめく刃やいば、  
 あはれ、驚破すは、火かとならむ、噴水ふきあげも、精舎しやうじやも、空くうも。  
 紅くれないの、戦慄わななきの、その極はての  
 瞬間たまたゆらの叫喚さけび燬やき、牛才めしロンぞ盲めしひたる。

こほろぎ

微ほのにいまこほろぎ啼なける。

日ひか落おつる——眼めをみひらけば

四十年十二月

朱しゆの畏怖おそれくわと照しりひびく。

内ない心しんの苦にがきおびえか、

めくるめく痛いたき日ひの色いろ

眼めつぶれど、はた、照しりひびく。

そのなかにこほろぎ啼なける。

とどろめく銃つゝ音おとしばし、

痕きずつける悪あくのうごめき

そこここに、あるは疲つかれて

轆しきなやむ砲はう車しゃのあへぎ、

逃げまどふ赤きもろづゑ。

そのなかにこほろぎ啼ける。

盲<sup>めし</sup>ひ、ゆく恋のまぼろし——

その底に疼<sup>うず</sup>きくるしむ

肉の鋭<sup>しむ</sup>き絶<sup>争るど</sup>叫<sup>さけび</sup>、

はた、暗<sup>くら</sup>き曲<sup>きよく</sup>の死<sup>し</sup>の楽<sup>がく</sup>

霊<sup>たま</sup>ぞ弾<sup>しひ</sup>きも連<sup>つ</sup>れぬる。

そのなかにこほろぎ啼ける。

あなや、また呻吟うめきは洩もるる。

なまり

鉛なまりめく首うのあたりゆ

いうかい

幽界のろひの呪咀のろひか洩るる。

寝ねがへれば血ちに染み顫ふるふ

わが敵面かたむちぞ死しにたる。

そのなかにこほろぎ啼ける。

はた、裂さくる赤あかき火ひの弾丸たま

たと笑わらふ、と見る、我われ燬やき

我ならぬ獣けもののつらね  
真黒まぐろなる楽がくして奔はしる。  
執念しふねんの闇曳はしき奔る。

そのなかにこほろぎ啼ける。

日や暮るる。我はや死ぬる。

野をあげて末期まつごのあらび――

暗くらき血ちの海うみに溺おぼるる

赤あかき悲ひく苦く、赤あかきくるめき、

ああ、今し、くわとこそ狂へ。



微ほのになほこほろぎ啼なける。

## 序楽

ひと日、わが想おもひの室むろの日もゆふべ、

光、もののね、色、にほひ——声なき沈黙しじま

徐おもむろにとりあつめたる室むろの内うち、いとおもむろに、

薄くれがた暮のタンホイゼルの譜ふのしるし

四十年十二月

ながめて人はゆめのごとほのかにならぶ。

壁はみな鈍にぶき愁うれひなりいでし

象ざうの香かの色まろらかに想鎖おもひしぬれ、

その隅に瞳の色の窓ひとつ、玻璃はりの遠見とほみに

冷ひえはてしこの世のほかの夢の空

かはたれどきの薄うす明あかりほのかにうつる。

あはれ、見よ、そのかみの苦惱なやみむなしく

壁はいたみ、円まろ柱はしら熔とろけくづれて

朽くちはてし熔岩ラヴァに埋うもるるポンペイを、わが幻まぼろしを。

ひとびとはいましゆるかに絃いとの弓、

はた、もろもろの調てうがく樂うつはの器をぞ執る。

暗みゆく室むろぬち内よ、暗みゆきつつ

想おもひの沈黙しじま重たげに音おとなく沈み、

そことなき月かげのほの淡あはくさし入るなべに、

はじめまづオオロンのひとすすりなき、

鈍にびいろ色こころも長き衣みな瞳をつぶる。

燃えそむるヴェスオアス、空のあなたに

色あたら新くれなゐしき紅の火ぞ噴ふきのぼる。

廃すたれたる夢の古墟ふるつか、さとあかる我室わがむろの内、  
 ひとときうづまに渦卷うづまきかへす序じよのしらべ  
オオケストラ  
 管絃樂部のうめきより夜よには入りぬる。

納曾利

入日のしぼし、空はいま雲の震慄おびえのあかあかと  
すると  
 鋭すにわかく、はた、苦にがく狂くるひただるる楽がくの色。  
 また、高窓の鬱金香うこんかう。かげに斃たふるる白牛しろうしの

四十一年二月

眉間みけんのいたみ、憤いきどほり怒ど。血ちに笑えむ人がさけびごゑ。

さあれ、いま納會利なそりのなげき……

鈍にぶき思おもひの灰はひ色いろの壁やぬちの家内うちに、

吹ふき鳴ならす古ふるき舞樂ぶがくの笙せうの節ふし、

納會利なそりのなげき……

納會利なそりのなげき、ひとしなみ

おほらうたれにほふ雅樂寮うたれの古ふるきいみじき日うれの愁ひ、

納會利なそりの舞まひの

人のゆめ、鈍にぶくものうき足あしどりの裾すそゆるらかに、

おもむろの振ふりのみやびの舞まひあそび、

納會利なそりのなげき……

くりかへし、さはくりかへし、

ゆめのごと後しりへつに連せうる笙ふしの節、

笛ふえのねとりもすずろかに、広ひろき家内やぬちに、

おなじことおなじ嫺なよびにくりかへし、

舞まへる思おもひの

倦うめる思おもひのにほやかさ、

ゆるき鞆鼓かつこの

音ねもにぶく、

ふる なそり まひ  
古き納曾利の舞をさめ……

いま まち そらか  
今しも街の空高く消ゆる光のわななきに、  
ほのかに青く、なほ苦く顛ひくづる雲の色。  
また、浮きのこる鬱金香。暮れて果てたる白牛の  
声なき骸。人だかり、血を見て黙す冷笑。

ほのかにひとつ

四十一年七月

罌粟けしひらく、ほのかにひとつ、

また、ひとつ……

やはらかき麦生むぎふのなかに、  
軟風なよかぜのゆらゆるそのに。

薄うすき日の暮るとしもなく、  
月つきしろの顫ふるふゆめぢを、

纏もつれ入るピアノの吐息といき

ゆふぐれになぞも泣かるる。



さあれ、またほのに生れあゆく  
色あかきなやみのほめき。

やはらかき麦生むぎこふの靄あに、  
軟風なよかぜのゆるゆる胸むねに、

罌粟けしひらく、ほのかにひとつ、  
また、ひとつ……

四十一年二月

## 耽溺

あな<sup>かな</sup>悲し、紅<sup>あか</sup>き帆<sup>ほ</sup>きたる。  
 聴<sup>き</sup>けよ、今<sup>いま</sup>、紅<sup>あか</sup>き帆<sup>ほ</sup>きたる。

白<sup>はくじつ</sup>日の光の水脈<sup>みを</sup>に、  
 わが恋の器楽<sup>きがく</sup>の海に。

あはれ、聴<sup>き</sup>け、光は噎<sup>むせ</sup>び、  
 海顛<sup>うねり</sup>ひ、清搔<sup>すがきこ</sup>焦<sup>こ</sup>がれ

眩暈めくるめく悲愁かなしみの極はて、

苦悶もだえそふ歓楽よろこびのせて

キュラソオの紅あかき帆ほひびく。

弾ひけよ、弾ひけ、毒どくの牛オロン

吹ひけよ、また媚薬びやくの嵐。

あはれ歌、あはれ幻まぼろし、

その海あかに紅ほき帆光る。

海の歌きこゆ、このとき、

『噫あゝ、かなし、炎ほのほよ、慾よくよ、

接吻くちづけよ。』

聴けよ、またにが苦き愛あいぢやく着、

肉しゝむらのおびえと恐怖おそれ、

『死ねよ、死ね』、あか紅き帆響ほひゞく、

『恋よ、な汝よ。』

弾ひけよ、弾ひけ、毒のオオロン

吹けよ、また媚薬びやくの嵐。

一ひととき瞬よ、——光よ、水脈みよ、

楽がくの音ねよ——酒のキュラソオ、

接吻くちつけの非命ひめいの快樂けらく、

毒水どくすゐの火のわななきよ。

狂くるへ、狂くるへ、破滅ほろびの渚なぎさ、

聴くははや楽がくの大極たいきよく、

狂きやうらん乱らんの日の光吸すふ

紅あかき帆つひの終つひのはためき。

死なむ、死なむ、二人ふたりは死なむ。

紅あかき帆ほきゆる。

紅あかき帆ほきゆる。

といき

おほそら  
大空に落日ただよひ、

旅しつつ燃えゆく黄雲。  
きぐも

そのしたの伽藍の藪  
がらんいらか

なかばき  
半黄になかばほのかに、

うすやみ  
薄闇に蠟の火にほひ、

まろはしら  
円柱またく暮れたる。

四十年十二月

ほのめくは鳩しらほの白羽か、  
しきいし敷石いしの闇にはひとり  
めしひ盲の子ひたと膝つけ、  
 ほのかにも尺しやくはち八ふ吹ける、  
 あはれ、その追分おひわけのふし。

黒船

四十年十二月

黒煙くろけぶり ほのにひとすぢ。――

あはれ、日は血を吐く悶もだえあかあかと

濡れつつ淀よどむ悪あくの雲そのとどろきに

燃え狂ふ恋慕れんぼの楽がくの断末魔だんまつま。

遠目とほめに濁る蒼海わだつみの色こそあかれ、

黒潮くろしほの水脈みのはたての水けぶり、

はた、とどろ撃うつ毒の砲弾たま、清すずしき喇叭らっぱ、

薄暮くれがたの朱あけのおびえの戦たかひに

疲れくるめく衰おとろへぞああ音ねを搾しほる。

黒煙くろけぶり またもふたすぢ。――



序じよのしらべ絶たえつ続つきつ、いつしかに

黒くろき悩なやみの旋せん律りつぞ渦うづ巻まき起おこる。

逃にげ来くるは密みつ獵れう船せんの旗はたじるし、

瘡きずき瘧むせぶ血ちと汚けが穢れ、はた憤いきどほり 怒ど

おしなべて黄わうばみ騒さわ立たつ楽がくの色いろ。

空あかには苦にがき嘲あざ笑けりに雲くもかき乱みだれ、

重おもりゆく煩もだえ悶ものあらびはやもまた

黒おそき恐おそ怖れのはたためき海うみより煙けむりる。

黒煙くろえん三さんすぢ、五ごすぢ。——

幻げん法ぽふのこれこれこや苦くるしき脅おび迫やかし

いと淫みだらかに蒸し挑いどむ疾風はやちのもとに、

現まれて真黒まぐろに歎なげく楽がくの船、

生なまあをじろき鱧ふかの腹ただほのぼのと、

暮れがての赤きくるしみ、うめきごゑ、

血かの甲か板はんのうへにまた爛たれて叫いぶ

樂げう慾よくの破片はへんの砲彈たまぞ慄わなける。

ああその空にはたたためく黒き帆のかけ。

黒煙終に七すぢ。——

吹きかはす銀ぎんの喇叭はもたえだえに、

渦うず卷まき猛たける楽がくの極はて、蒼わだつみ海うみけぶり、

悪あくの雲とどろとどろの乱擾らんぜうに

急あわただ忙むさしくも呪のろはしき夜よのたたずまひ。

濡ぬれ焙いぶる水無月ぞらの日の名残なごり

はた搔かき濁にごし、暗澹あんたんと、あはれ黒船くろふね、

真黒なる管絃オオケストラ樂の帆ひの響びびき

死しと悔くわい恨こんの闇擾みだし壊くづれくづるる。

地平

四十一年二月

あな哀れ、あは今日もまた銅あかがねの雲をぞ生める。

あな哀れ、あは明日も亦鈍にぶき血どくの毒をや吐かむ。

見るからにただ熱あつし、心は重し。

察はかるだにいや苦くるし、愁うれひはおもし。

かの青くき国のあこがれ、

つねに見る地ちへい平のはてに、

大空おほぞらの真昼まひるの色と、

連れて弾ひく緑みどりひとつら。

その緑琴柱みどせとぢにはして、

弾きなづむ鳩の羽の夢、

ほろほしつるぎ

幌ほろの星、劍ほしのなげき、

すががき

清搔すががきはほのかに薰くゆる。

さては、日の白おそれき恐怖おそれに

静たいこかなる太鼓たいこのたろぎ、

ひるし

昼領ひるしらす神かうか拊うたせる、

ころころとまたゆるやかに。

また絶えず、吐息といきのつらね

かなたより笛してうかび、  
 こなたより絃いとして消ゆる、  
 ほのかなる夢のおきふし。

しかはあれ、ものなべてお圧す

南なんごく国の熱病雲ぞ

猥みだらなる毒どくの謊うはごと言

とどろかに歌かき濁にごす。

おもふ、いま水はなに華はなさき、  
 野のに赤こまき駒たふは斃たふれむ。

うらうへに病やましき現象きざし  
けふ今日もまたどよみわづらふ。

あな哀あはれ、昨きその日も銅あかがねのなやみかかりき。  
 あな哀あはれ、明日あすもまた鈍にぶき血にごりの濁にごりかからむ。

聴あつくからにただ熱あつし、心は重し。  
 思あつふだにいやくるし、愁は重し。

四十年十二月

## ふえのね

ほのかに見ゆる青き頬<sup>ほ</sup>、

あな、あな、玻璃<sup>はり</sup>のおびゆる。

かなたにひびく笛のね、  
……

青き頬<sup>ほ</sup>ほのに消えゆく。

室<sup>むろ</sup>にもつるふえのね、  
……

ふたつのほひ盲<sup>し</sup>ひゆく。



きこえずなりぬふえのね、……  
うち<sup>うち</sup>そと<sup>そと</sup>  
内と外とのなげかひ。

またしも見ゆる青き頬<sup>ほ</sup>。

あな、また玻璃<sup>はり</sup>のおびゆる。

下枝のゆらぎ

日はさしぬ、白楊<sup>はくやう</sup>の梢<sup>こずえ</sup>に赤く、

四十一年二月

さはあれど、暮れ惑ふ下枝のゆらぎ……

水みづの面ものやはらかきにはひの嘆なげき

波なみもなき病やましさに、澗とろみうつれる

晩春おそはるの窓閉す片側街よ、

暮れなやむ靄うちつづみの内 鼓うをうてる。

いづこにか、もの甘き蜂すの巢すのこゑ。

幼子をさなごのむれはまた吹フル笛鳴らし、

白楊はくやうの岸きしにそひ曇り黄きばめる

教けう会くわいの硝子窓がらすまどながめてくだる。

日はのこる 両側もろがはの梢こずゑにあかく、

さはあれど、暮れ惑まどふ下枝しづえのゆらぎ……

またあれば、公園こうえんの長椅子ベンチにもたれ、

かなたには恋慕れんぼびと苦惱なやみに抱く。

そのかげをのどやかに嬰兒あかご匍はひいで

鶯がの鳥とりを捕とらむとて岸きしゆ落ちぬる。

水面みのもなるひと騷擾さやぎ、さあれ、このとき、

驀然ましぐらに急いぎくる 一列ひとつらの郵便馬車いびんばしやよ、

薄闇うすやみにほひゆく赤くき曇もりの

こころよ  
快さ、人はただ街をばながむ。

あかじも  
灯点る、さあれなほ梢はにほひ、  
また  
全くいま暮れはてし下枝のゆらぎ……

雨の日ぐらし

ち、ち、ち、ち、と、もののせはしく  
きざおと  
刻む音……

四十一年八月

河岸かしのそば、

黴かびの香かのしめりも暗し、

かくてあな暮れてもゆくか、

駅えきてい逡きよくの局ながかべの長壁

灰はひいろ色いろに、暗あやみきうれひに、

おとつひも、昨きのふ日も、今けふ日も。

さあれ、なほ薰くゆりのこれる

一ひとつら列あかの紅はなけしき花し罌粟

かたかげの草に濡れつつ、  
うちしめり浮きもいでぬる。

雨はまたくらく、あかるく、  
やはらかきゆめの曲節めろでい……

ち、ち、ち、ち、と絶えずせはしく  
刻む音きざ……

角窓の玻璃はりのくらみを  
死しの報知しらせひまなく打電うてる。  
さてあればそこはかとなく



雨はまたゆるにしとしと

暮れもゆくゆめの曲節……  
めろでい

いづこにか鈴すゞの音ねしつつ、

近く、

はた、速きのく軋しり、

待ちあぐむ郵便馬車いっぴんばしやの

旗いろの色見えも来こなく、

うち曇る馬の遠嘶とほなき。

さあれ、ふと







灰色はひいろの局きよくは夜よに入る。

## 狂人の音楽

空気くうきは甘し……また赤し……黄きに……はた、緑みどり……

晩夏おそなつの午後五時半の日につくわう光かげりはを見せて、  
蒸し暑ふきあく噴水ぬに濡れて照りかへす。

四十一年五月

瘋癲院ふうてんいんの陰鬱いんうつに硝子がらすは光り、  
 草場くさばには青き飛沫しぶきの茴香酒アフサントビ冷えたちわたる。

いま狂きやうじん人のひと群むれは空うち仰ふぎ――

響きやうえん宴がくきの楽器とりどりかき抱いだき、自棄やけに、しみらに、

傷きずつける獣けもののごとき雲おもの面

ひたに怖しきまうれて色まぼろし盲まぼろしの幻覚まぼろしを見る。

空気くうきは重しきまうし……また赤あかし……共に……はた緑みどり……

\* \* \* \* \*

\* \* \* \* \*

オボー鳴る……また、トロムボオン……

狂<sup>くる</sup>ほしき牛オラの唸<sup>うなり</sup>……

ひとり  
一人の酸<sup>す</sup>ゆき音<sup>ね</sup>は飛<sup>と</sup>びて怜<sup>かも</sup>羊<sup>しか</sup>となり、  
ひとつは赤<sup>あか</sup>き顔<sup>かほ</sup>ゑがき、笑<sup>わら</sup>ひわななく  
音<sup>ね</sup>の恐<sup>おそ</sup>怖<sup>それ</sup>……はた、ほのしろき髑<sup>どくろ</sup>髒<sup>まひ</sup>舞<sup>まひ</sup>……

弾<sup>ひ</sup>け弾<sup>ひ</sup>け……鳴<sup>な</sup>らせ……また舞<sup>を</sup>踏<sup>ど</sup>れ……

セロの、喇<sup>ら</sup>叭<sup>っぱ</sup>の蛇<sup>へび</sup>の香<sup>か</sup>よ、

はた、爛<sup>た</sup>れ泣<sup>な</sup>く牛オロンの空<sup>そら</sup>には赤<sup>あか</sup>子<sup>こ</sup>飛<sup>と</sup>びみだれ、  
妄<sup>まう</sup>想<sup>さう</sup>狂<sup>きやう</sup>のめぐりにはバツソの盲<sup>めし</sup>目<sup>ひ</sup>

小さなる骸しかばねいろ色の呪咀のろひして逃のがれふためく。

弾け弾け……鳴らせ……また舞踏をどれ……

クラリネットの槍やりさき尖よ、

メロヂア  
曲節ゆるのひらめき緩く、また急はやく、

アルト歌者うたひのなげかひを暈くらましながら、

ひとつらね  
一列、血しほしたたる神経しんけいの

壁の煉瓦れんぐわのもとを行ゆく……

弾け弾け……鳴らせ……また舞踏をどれ……、

かなしみの蛇、<sup>へび</sup>緑の眼  
 槍に貫かれてまた歎く……

弾け弾け……鳴らせ……また舞踏れ……

はた、吹<sup>フルウト</sup>笛の香のしぶき、

青じろき花どくだみの鋭<sup>するど</sup>さに、

濁りて光る山椒魚、沼の調に音は瀟<sup>とろ</sup>む。

弾け弾け……鳴らせ……また舞踏<sup>をど</sup>れ……

傷きずきめぐる 観くわん覧らん車しゃ、

はたや、太たい鼓この悶もん絶ぜつに列つらなり走はしる 槍やり尖さきよ、

窓がらすの硝がらす子すに火はは叫さけび、

月げつ琴きんの雨あめふりそそぐ……

弾ひけ弾ひけ……鳴ならせ……また舞を踏どれ……

赤あかき神しん経けい……盲めしひし血ち……

聾ろうせる脳のうの鑢やすりの音ね……



弾け弾け……鳴らせ……また舞踏れ……

\* \* \* \* \*

空気は酸し……いま青し……黄に……なほ赤く……

\* \* \* \* \*

はやも見よ、日の入りがたの雲の色

狂気の楽の音につれて波だちわたり、

悪獣の蹠のごと血を滴す。

そがもとに噴水のむせび

濡れ濡れて薄闇に入る……

空気は重し……なほ赤し……黄に……また緑……

いつしかに蒸汽の鈍き船腹の

ごとくに光りがぎろひし瘋癲院も暮れゆけば、  
ただ冷えしづく茴香酒、鋭き玻璃のすすりなき。

草場の赤き一群よ、眼ををののかし、

躍り泣き弾きただらかす歓樂の

はてしもあらぬ色盲のまぼろしのゆめ……

午後の七時の印象はかくて夜に入る。

空気は苦し……はや暗し……黄に……なほ青く……

四十一年九月

風のあと

夕日はなやかに、  
ゆふひ

こほろぎ啼く。  
な

あはれ、ひと日、木の葉ちらし吹き荒みたる風も落ちて、  
すさ

夕日はなやかに、  
ゆふひ

こほろぎ啼く。

月の出

ほのかにほのかにねいろ音色ぞ揺る。

かすかにひそかにほひぞ鳴る。

しみらなみたに列立つわかほびき白楊、

その葉のくらみにふるこころ顛ふ。

四十一年八月

ほのかにほのかに吐息といきぞ揺る。  
 かすかにひそかに雫しづくぞ鳴る。  
 あふげばほのめくゆめの白楊ほびゆら、  
 愁うれひの水みの面もを權かゝいはすべる。

吐息といきのをののき、君が眼めざし  
 やはらに纏もつれてたゆたふとき、  
 光ひかりのひとすぢ——顫ふるふ白楊ほびゆら  
 文月ふづきの香炉かうろに濡ぬれてけぶる。

さてもゆるけくにほふ夢路ゆめぢ、

したたりしたたるかい權のしづく、  
 薄らしに沁みゆく月のでしほ  
 ほのかにわれらが小舟をふねぞゆく。

ほのめく接吻くちつけ、からむ頸うなじ、

いづれか恋慕れんぼの吐息といきならぬ。

夢見てよりそふわれら、白楊ほびゆら、  
みなかみす水上透かしてこころ顫ふるふ。

四十一年二月

## 外光と印象

近世仏国絵画の鑑賞者をわかき旅人にたとへばや。もとより Watteau の羅曼底、Corot の叙情詩は唯微かにそのおぼろげなる記憶に残れるのみ。やや暗き Fontainebleau の森より曇れる道を巴里の市街に出づれば Seine の河、そが上の船、河に臨める〔Cafe〕の、皆「刹那」の如くしるく明かなる Manet の陽光に輝きわたれるに驚くならむ。そは Velazquez の灰色より俄に現れいでたる午后の日なりき。あはれ日はやうやう暮れてぞゆく。金緑に紅薔薇を覆輪にしたりけむ Monet の波の面も青みゆき、青みゆき、

ほのかになつかしくはた悲しき Catin の夕は来る。燈の薄黄は W  
histler の好みの色とぞ。月出づ。Pissarro のあをき衝を Verlaine  
の白月の賦など口荒みつつ過ぎゆくは誰が家の子ぞや。

太田正雄



## 冷めがたの印象

あわただし、旗ひるがへし、  
 朱しゆの色の駅えきていぐるまをど、  
 通馬車跳りゆく。

曇くもりび日の色なき街まちは

清水しみづさす石油せきゆの噎むせび、

轆しかれ泣く停車場ていしやばの鈴すず、  
 溝みぞの毒どく、

昼しやみの三味やすりず、  
 鑪磨やすりする歌、

茴香酒アブサンの青み泡だつ火さけびの叫さけび、

絶えず眩くるめく白楊、遂やまならしに疲れて

マンドリン奏かなでわづらふ風の群むれ、

あなあはれ、そのかげに乞食かたるゆきかふ。

くわと来り、燃もえゆく旗は

死おに墮つる、夏の光のうしろかげ。

灰色の亜鉛とたんの屋根に、

青銅せいどうの擬宝珠ぎぼしゆの鏝さびに、

また寒ものみなき万象うれひの愁うれひのうへに、

爛たゞれ弾ひく猩紅しやうこう熱ねつの火しらべの調べ、

狂きやう氣きの色いろと冷さめがたの疲つかれれに、今は  
 ひた嘆なげく、悔くと、悩なやみと、戦をの慄きと。

あかあかとひらめく旗は  
 猥みだらなるその最い終はの夏きの曲よく。

あなあはれ、あなあはれ、  
 あなあはれ、光消えさる。

四十年十一月

赤子

赤子啼く、

はやくせ  
急き瀬の中。

壁重き女囚の牢獄、  
ぢよしう ひとや

てつもん  
鉄の門、

いんよく  
淫慾の蛇の紋章  
もんしやう

くわとおびえ、

いりひ  
水に、落日に

照りかへし、

黄ばむひととき。

赤子啼く、  
あかごな  
急き瀬の中。  
はやせうち

暮春

ひりあ、ひすりあ。

しゆツ、しゆツ……

四十一年六月

なやまし、河岸かしの日のゆふべ、

日の光。

ひりあ、ひすりあ。

しゆツ、しゆツ……

がんくわ眼科まどの窓すりの磨硝子がらす、しどろもどろの  
はくやう白楊ぬるの温といきき吐息くわにくわとばかり、

ものあたたかに、くるほしく、やはく、まぶしく、

蒸よどし淀ゆふひむ夕日の光。

黄<sup>き</sup>のほめき。

ひりあ、ひすりあ。

しゆツ、しゆツ……

なやまし、またも

いづこにか、

なやまし、あはれ、

音<sup>ね</sup>も妙<sup>たへ</sup>に

紅<sup>あか</sup>き嘴<sup>はし</sup>ある小鳥らのゆるきさへづり。

ひりあ、ひすりあ。

しゆツ、しゆツ……

はた、おほかは大河のすにこ鯉え濁る、かし河岸のまぢかを

ぎちぎちと病やましげにとろろぎめぐる

はいいるぎ灰色黄ばむこじようぎ小蒸汽のぬ温るく、まぶしく、

またゆるくとりぎふ噴くゆげ湯気

いま懈たゆく、

また絶えず。

ひりあ、ひすりあ。



しゆツ、しゆツ……

いま病びやうめん院いんの裏庭うらにはに、煉瓦れんがのもとに、  
 白楊はくやうのしどろもどろの香かのかげに、

窓がらすの硝子に、

まじまじと日ひな向な求もとむる病やまうど人は目めも悩なやましく

見ぼぞ夢しゆんむ、暮ぼし春ゆんの空と、ものねと、

水と、にほひと。

ひりあ、ひすりあ。

しゆツ、しゆツ……

なやまし、ただにやはらかに、くらく、まぶしく、  
また懈<sup>た</sup>ゆるく。

ひりあ、ひすりあ。

しゆツ、しゆツ……

噴水の印象

四十一年三月

噴水ふきあげのゆるきしたたり。――

霧すゐしぶく苑そのの奥、夕日ゆふひの光、

水盤すゐばんの黄きなるさざめき、

なべて、いま

ものあまき嗟嘆なげかひの色。

噴水ふきあげの病やめるしたたり。――

いづこにか病児びやうじ啼なき、ゆめはしたたる。

そこここに接吻くちつけの音おと。

空は、はた、

暮れかかる夏のわななき。

噴ふきあげ水の甘きしたたり。――

そがもとに瘕きずつける女神ぢよじんの瞳。

はた、赤き眩暈くるめきうちの中、

冷ひやみ入る

銀ぎんの節ふし、雲のとどろき。

噴ふきあげ水の暮るるしたたり。――

くわとぞ蒸むす日のおびえ、晩夏ばんかのさけび、

濡れ黄ばむ憂鬱ヒステリイ症のゆめ

青む、あな

しとしとと夢はしたたる。

四十一年七月

顔の印象 六篇

A 精舎

うち沈む ひろびろ 額、 ひたひ 夜のごとも くぼ 凹める まなこ 眼——  
 いや深く、 いや重く、 泣きしづむ たまし 霊の しやうじや 精舎。  
 それか、 げ 実に声もなき とねりこ 秦皮の森のひまより

熟視みむるは暗くらき池、谷やそのこの水のをののき。

いづこにか薄うす日ひさし、きしりこきり斑いかるが鳩がなげく

寂寥さみしらや、空の色いろなほ紅あけにほひのこれど、

静しずかなる、はた孤獨ひとり、山間やまあひの霧きりにうもれて

悔くいと夜よのなげかねもひごを懇つに通夜つやし見まもる。

かかる間まも、底そこふかく青あをの魚盲めしひあぎとひ、

口くちそそぐ夢ゆめの豹水へうの面おもに血音ちのたてつつ、

みな冷ひやき石いしの世よと化なりぞゆく、あな恐怖おそれより。

かくてなほ声こゑもなき秦皮とねりこよ、秘ひそに火ひともし、

精しやうじや 舎しゃ また水晶すいせいと凝こごる時とき愁うれひやぶれて  
響ひびきいづ、響ひびきいづ、最いやはて終はての靈たまの梵ぼん鐘しよう。

以下五篇——四十一年三月

B 狂へる街

緒あからめる暗くらき鼻はな、なめらかに禿はげたる額ひたひ、  
痙ひきつ攣つれる唇くちの端はし、光あかりなくなやめる眼まなこ、  
なにか見る、夕ゆふ榮ばえのひとみぎり噎むせぶ落いり日に、  
熱ねつ病びやうの響ひびする煉れん瓦ぐわ家やか、狂まへる街まちか。

見るがまに焼酎せうちうの泡あわしぶきひたぶるなげ歎なげく  
 そが街まちよ、立てつづく尖屋とがりやね根血つかばみ疲つかれて  
 雲赤くもだゆる日、悩なやましく馬車ばしやか駆るやから  
たましひ霊たましひのありかをぞうち惑まどひ窓まどふりあふぐ。

その窓まどに盲めしひたる爺おぢひとり鈍にぶき刃はと研とげる。  
 はた、唾おふしゆ朱しゆに笑しびひ痺しびれつつ女をみなとを説とける。  
つぎ次つぎなるは聾ろうしぬる清あましやみせんき尼ひ三味線さんまいせん弾ひける。

しかはあれ、照あり狂まふ街まちはまた酒さけと歌うたとに



しどろなる舞まひの列れつあかあかと淫たはれくるめき、  
 馬車ばしやのあと見もやらず、意味いみもなく歌たふひ倒るる。

### C 醋の甕

蒼あをざめし汝なが面おも鏡てすえよどむ瞳ひとみのにごり、  
 薄くれがた暮たに熟みつ視みめつつ撓たわみちる髪かの香かきけば――  
 醋すの甕かめのふたならび人もなき室むろに沈しみて、  
 ほの暗くらき玻璃はりの窓まどひややかに愁うれひわななく。

とのも  
外面なる嗟嘆よ、波もなきいんくの河に

旗青き独木舟そこはかと巡り漕ぎたみ、

見えわかぬ悩より錨曳き鎖巻かれて、

伽羅まじり消え失する黒蒸汽笛ぞ呻ける。

吊橋の灰白よ、疲れたる煉瓦の壁よ、

たまたまに整はぬ夜のピアノ淫れさやげど、

ひとびとは声もなし、河の面をただに熟視むる。

はた、甕のふたならび、さこそあれ夢はたゆたひ、

内と外かぎりなき懸隔に帷墮つれば、

あな悲し、あな暗し、醋の沈黙長くひびかふ。

## D 沈丁花

なまめけるわが女をみな、汝なは弾ひきぬ夏の日の曲きよく、  
 悩なやましき眼めの色いろに、髪かみ際ぎはの紛こなおしろひに、  
 緞つぐみたる色いろあかき唇くちびるに、あるはいやしう  
 肉しむらの香かに倦うめる猥みだらなる頬ほのほほゑみに。

響ひびかふは呪のろはしき執しふと欲よく、ゆめもふくらに  
 頸うなじ巻まく毛けのぬくみ、真ま白しろなるほだしの環たまき  
 そがうへに我きぞ聴きく、沈ちん丁てう花げたぎる畑はたけを、

堪<sup>た</sup>へがたき夏の日を、狂<sup>くる</sup>はしき甘<sup>あま</sup>きひびきを。

しかはあれ、またも聴く、それが焔<sup>はた</sup>に隣<sup>とな</sup>る河岸側<sup>かしきは</sup>、

色<sup>いろ</sup>ざめし浅葱幕<sup>あさぎまく</sup>しどけなく張りもつらねて、

調<sup>しら</sup>ぶるは下司<sup>げす</sup>のうた、はしやげる曲馬<sup>チャリネ</sup>の囃子<sup>はやし</sup>。

その幕<sup>まくら</sup>の羅馬字<sup>らうまじ</sup>よ、くるしげに馬<sup>い</sup>は嘶<sup>いなな</sup>き、

大喇<sup>おほらつ</sup>叭<sup>ぼ</sup>鄙<sup>ひな</sup>びたる笑<sup>わら</sup>してまたも挑<sup>いど</sup>めば

生<sup>なま</sup>あつき色<sup>いろ</sup>と香<sup>か</sup>とひとさやぎ歎<sup>なげ</sup>きもつるる。

E 不調子

われは見る汝が不調、—— 萎びたる瞳の光沢に、  
 おとろへ<sup>ほ</sup>衰の頬ににほふおしろひの厚き化粧に、  
 あはれまた褪せはてし髪まげつよの鬢強きくゆりに、  
 しむらわな<sup>なき</sup>肉の戦慄を、いや甘き欲よくの疲労つかれを。

はた思ふ、晩夏おそなつの生なまあつきにほひのなかに、  
 倦うみしごともつとしんかい纏れ入るいと冷ひやき風といきの吐息を。  
 新開しんかいの街は鏽さびびて、色赤く猥みだるる屋根を、  
 濁りたる看板かんばんを、入り残る窓の落日いりひを。

なべてみな整ととのはぬ色の曲ふし……ただに鋭すどき  
 ソプラノ  
 最高音の入り糲ましり、埃ほこりたつ家やなみのうへに、  
 色にぶき土蔵どざう家の江戸芝居えどしばゐひとり古りたる。

露あらはなる日の光、そがもとに三味しやみはなまめき、  
 へうしぎなげき  
 拍子木の歎なげきみたいと痛いたし古いたき痕たに、  
 おとろへ  
 かくてあな衰おとろのものいろ空そらは暮れ初はじむ。

F 赤き恐怖

わかうどよ、汝なはくるし、尋とめあぐむ苦悶くもんの瞳ひとみ、

秀でたる眉のゆめ、ひたかわく赤き唇くちびる

みな恋の響なり、熟視みむれば——調しらべかなでて

火のごとき馬ぐるま燃え過ぐる窓のかなたを。

はた、辻の真昼まひるどき、白楊はこやなぎにほひわななき、

雲浮かぶ空そらの色生なまあつく蒸しも汗あせばむ

街まちよ、あな音もなし、鐘はなほ鳴りもわたらね、

炎えんじやう上うへの光また眼めにうつり、壁かべぞ狂くるへる。

人もなき路のべよ、しとしとと血ちを滴したたらし

胆きもぬ抜ぬきて走る鬼、そがあとにただに餓うゑつつ

色赤き郵便函のみくるしげにひとり立ちたる。

かくてなほ窓の内すずしげに室は濡るれど、  
 戸外にぞ火は熾る、……哀れ、哀れ、柵の上に見よ、  
 水もなき消火器のうつろなる赤き戦慄。

### 盲ひし沼

午後六時、血紅色の日の光  
 盲ひし沼にふりそそぎ、濁の水の



声もなく傷き眩む生おびえ。  
きずつくらなま

鉄の匂のひと冷み沁みは入れども、  
てつにほひひやし

影うつす煙草工場の煉瓦壁。  
たばここうばれんぐわかべ

眼も痛ましき香のけぶり、機械とどろく。  
めいたいたかきかい

鳴ききたる鵜島のうから  
がてう

しらしらと水に飛び入る。

午後六時、また噴きなやむ管の湯気、  
ふすはだかわかも

壁に凭りたる素裸の若者ひとり  
よすはだかわかも

腕拭き鉄の匂にうち噎ぶ。  
かいなぶ てつ むせ

はた、あかあかと蒸気罐音なく叫び、  
じようきがまおと

そこここに咲きこぼれたる芹の花、  
せり

あなや、しとどにおしなべて日ぞ照りそそぐ。

声もなき鷺鳥のうから  
がてう

色みだし水に消え入る

午後六時、鷺鳥の見たる水底は  
がてう みなぞこ

血潮したたる沼の面の負傷の光  
ぬま も てきず

かき濁る泥の臭みに疲れつつ、  
どろ くさ つか

水死すゐしの人の骨のごとちらぼふなかに  
もの鈍にぶき鉛の魚のめくるめき、  
はた浮うかびくる妄念まうねんの赤きわななき。

逃にげいづる鷺鳥がてうのうから

鳴みぎきさやぎ汀はしを走る。

午後六時、あな水底みそこより浮びくる

赤きわななき——妄念たげの猛たけると見れば、

強き煙草てつに、鉄てつの香かに、わかき男をとめに、

顔がらすいだす硝子がらすの窓をとめの少女をとめらに血潮をとめしたたり、

顫ふるひ高まる苦痛くるしみぞ朱あけにくづる。  
 歡くわんらん樂らくの極はての恐怖おそれの日のおびえ、

刹那せつな、ふと太ふとく湯氣吐ゆげき  
 吼ほえいづる休息やすらひの笛。

青き光

哀あはれ、みな悩なやみ入る、夏の夜よのいと青き光のなかに、

四十一年七月

ほの白き鉄てつの橋、洞ほら円まるき穹あち窿ちの煉れん瓦ぐわ、  
 かげに来て米炊かしぐ泥どろ舟ふねの鉢はちの撫な子でしこ、  
 そを見ると見み下おろせる人ひと々びとが倦うみし面おもても。

はた絶えず、悩なやましの角つの光ひかりり電車でんしゃすぎゆく  
 河岸かなみの白かしき壁かべあはあはと瓦斯とも点ともれど、  
 うち向むかふ暗くき葉は柳やなぎ震わな慄なきつ、さは震わな慄なきつ、  
 後うしろよりはた泣なくは青あお白しろき屋いへの幽いうれ霊い。

いと青あおきソプラノの沈しずみゆく光ひかりのなかに、  
 籠すえて病やまむわかき日ひの薄く暮れのゆめ。――

幽霊の屋いへよりか洩れきたる呪のろはしの音ねの  
 ジムフォオニ  
 交響体のくるしみのややありて交まじりおびゆる。

いづこにかうち囃はやす幻燈げんとうの伴奏あはせの進行曲マアチ、  
 かげのごと往来ゆききする白しろの衣きぬうかびつれつつ、  
 映うつりゆく絵ゑのなかのいそがしさ、さは繰りかへす。  
 そのかげに苦痛くるしみの暗くらきこゑまじりもだゆる。

なべてみな悩なやみ入る、夏の夜よのいと青き光のなかに。——  
 蒸あつし暑なよき軟かぜら風あまもの甘あせき汗あせに揺ゆれつつ、  
 ほつほつと点ともれゆく水みづの面ものなやみの燈ともし、

鹹しほからき執しふの譜ふよ………み空には星ぞうまるる。

かくてなほ悩み顫ふるふわかき日の薄くれがた暮のゆめ。  
 見よ、苦にがき闇やみの滓街衢をりちまたには淀よどみとろげど、  
 新あらたにもしづきいづる星の華はな——泡あわのなげきに  
 色青き酒のごと空そらは、はた、なべて澄みゆく。

椀のふたもと

四十一年七月

うちけぶる<sup>もみ</sup>櫂のふたもと。

薄<sup>くれがた</sup>暮<sup>なから</sup>の山の半腹のすすき原、<sup>はら</sup>

若<sup>わか</sup>草<sup>くさいろ</sup>色の夕<sup>ゆふ</sup>あかり濡れにぞ濡るる

雨の日のものものしらべの微妙<sup>いみじ</sup>さに、

なやみ幽<sup>かす</sup>けき Chopin 《シオパン》の楽<sup>がく</sup>のしたたり

やはらかに絶えず霧するにほやかさ。

ああ、さはあかれ、嗟<sup>なげ</sup>嘆<sup>かひ</sup>の櫂<sup>もみ</sup>のふたもと。

はやにほふ<sup>もみ</sup>櫂のふたもと。

いつしかに色にほひゆく靄<sup>も</sup>のすそ、

しみらに燃<sup>も</sup>ゆる日の薄<sup>うす</sup>黄<sup>ぎ</sup>、映<sup>うつ</sup>らふみどり、



ひそやかに暗くらき夢弾ひく列並つらなみの

遠とほの山やま々おしなべてものやはらかに、

近ちかほとりほのめきそむる歌うたの曲ふし。

ああ、はやにほへ、嗟嘆なげかひの櫂もみのふたもと。

燃えいづる櫂もみのふたもと。

濡れ滴したる柑子かうじの色いろのひとつらね、

深き青みの重かさなりにまじらひけぶる

山の端はの縋もつれのなやみ、あるはまた

かすかに覗のぞく空のゆめ、雲のあからみ、

晩おそ夏の入口いりひに噎むせぶ夕ゆふながめ。

ああ、また燃ゆれ、なげかひ嗟嘆のもみ椀のふたもと。

色うつるもみ椀のふたもと。

しめやげる葬はふりの曲ふしのかなしみの

かす幽かにもものなまめきにゆらひ揺曳くなべに、

しづ沈みゆく雲の青みのシムフオニヤ階調、

はた、さまざまのあこがれのといき吐息くゆりの薫、

薄れつつうつらふきはの日のおびえ。

ああ、はた、響け、なげかひ嗟嘆のもみ椀のふたもと。

す饅くらえ暗む椀のふたもと。

燃えのこる想おもひのうるみひえびえと、

はや夜よの沈黙しじましのびねに弾きも絶え入る

列つらなみ並の山のくるしみ、ひと叢むらの

柑子かうじの靄のおぼめきも音ねにこそ呻うめけ、

おしなべて御龕みづしの空そらぞ饑すえよどむ。

ああ、見よ、悩なやむ、嗟嘆なげかひの縦もみのふたもと。

暮れて立つ縦もみのふたもと。

声もなき悲ひぐわん願願の通夜つやのすすりなき

薄らの闇に深みゆく、あはれ、法悦ほふえつ、

いつしかに筆ひちりき 策あかる谷のそら、

ほのめき顫ふるふ月つき魄しろのうれひ沁みつつ

夢青む忘我われかの原の靄の色。

ああ、さは顫ふるへ嗟嘆なげかひの櫂もみのふたもと。

夕日のにほひ

おそはるおそはる 夕日ゆふひのなか中に、

順じゆん礼れいの子はひとり頬ほをふくらませ、

濁にごりたる眼めをあげて管くだうち吹ける。

四十一年二月

腐れゆく檻樓つづれのほひ、  
 酢すと石油せきゆ……にじむ素足すあしに  
 落ちちれる果実くだものの皮、赤くうすく、あるは汚きたなく……

片手かたてには噛かぢりのこせし  
 林檎りんごをばかたく握にぎりぬ。

かくてなほ頬ほをふくらませ  
 怖おづおづと吹きいづる………珠たまの石しやぼん齧かよ。

さはあれど、珠たまのいくつは

なやましき夕ゆふぐれ暮くれのほひのなかに

ゆらゆらと円まろみつつ、ほつと消きえたる。

ゆめ、にほひ、その吐とい息……

彼かれはまた、

怖おづおづ々と、怖おづおづ々と、……眩まぶしげに頬ほをふくらませ

蒸むし淀よどむ空くう気にぞ吹きもいでたる。

あはれ、見よ、

いろいろのかがやきに濡ぬれもしめりて

円まろらにもものぼりゆく大おほきなるひとつの珠たまよ。

そをいまし見あげたる無むしん心の瞳ひとみ。

そびら  
背後には、血しほしたたる

こぶし  
拳あげ、

かす まち おほどけいにら  
霞める街の 大時計 睨みつめたる

さんもん にわう あか イリュウジヨン  
山門の仁王の赤き 幻想 ……

うら  
その裏を

ちやるめらのゆく……

四十一年十二月

## 浴室

水落つ、たたと……浴室の真白き湯壺

なめいしなやみゆげ  
大理石の苦惱に湯気ぞたちのぼる。

がらすそとにこりがは  
硝子の外の濁川、日にあかあかと

こじようきふなばら  
小蒸汽の船腹光るひとみぎり、太鼓ぞ鳴れる。

水落つ、たたと……はひいろとたん  
水落つ、たたと……灰色の亜鉛の屋根の

けいりうじよ  
繋留所、わが窓近き陰鬱に

ぎやうとく  
行徳ゆきの人はいま見つつ声なし、

川むかひ、わうかつしよく  
黄褐色の雲のもと、太鼓ぞ鳴れる。



水落つ、たたど………りやうごく 両 国 おほつりばし の 大吊橋は

うち煤すすけ、上手かみなめ斜なめに日あを浴あびて、

色薄き黄きばみ、はた重きく、ちやるめらまじり

忙せはしげよに夜よに入る子はこらが身はこの運はこび、太鼓ぞ鳴れる。

水落つ、たたど………もの甘く、あるひは赤く、

うらわかきわれの素肌すはだに沁しみきたる

鉄てつのみのもにほひと、腐くされゆく石しやほん 齧はのしぶき。

水面みのもには荷足にたりの暮れて呼ぶ声す、太鼓ぞ鳴れる。

水落つ、たたど………たたとあな音色ねいろ柔やはらに、  
 大理石なめいしの苦惱なやみに湯気ゆげは濃こく、温ぬるく、  
 鈍にぶきどよみと外ぐわい光くわうのなまめく靄霧に  
 疲つかれゆく赤あかき都とく会わいのらうたげさ、太鼓たいこぞ鳴れる。

四十一年八月

入日の壁

黄きに潤しめる港みなとの入日いりひ、  
 切支丹きりしたん 邪宗じやしゆうの寺てらの入口いりぐちの

暗<sup>くら</sup>めるほとり、色古りし煉瓦<sup>れんぐわ</sup>の壁に射かへせば、

静かに起る日の祈<sup>いのり</sup>禱、

『ハレルヤ』と、奥にはにほふ讃<sup>さん</sup>頌<sup>しやう</sup>の幽<sup>かす</sup>けき夢路<sup>ゆめぢ</sup>。

あかあかと精<sup>しやう</sup>舎<sup>うじや</sup>の入口。——

ややあれば大風<sup>おほ</sup>琴<sup>オルガン</sup>の音<sup>ね</sup>の吐息<sup>といき</sup>

たゆらに嘆<sup>なげ</sup>き、白蠟<sup>はくろう</sup>の盲<sup>し</sup>ひゆく涙。——

壁のなかには埋<sup>うづ</sup>もれて

眩暈<sup>めくるめ</sup>き、素肌<sup>すはだ</sup>に立てるわかうどが赤<sup>まほろ</sup>き幻<sup>し</sup>。

ただ赤き精<sup>しやう</sup>舎<sup>うじや</sup>の壁に、

妄念まうねんは熔とろくるばかりおびえつつ

全身ぜんしん落つる日を浴あびて真夏まなつの海をうち睨にらむ。

『サンタ聖マリア、イエスの御母みはは。』

一齊いつせいに礼拝終をろがみをはる老若らうにやくの消え入るさけび。

はた、白しらむ入日の色に

しづしづと白衣はくえの人らうちつれて

湿润しめりも暗とぐちき戸口より浮うびいでつつ、

眩まぶしげに数珠じゆずふりかざし急いそげども、

など知らむ、素肌すはだに汗あせし熔とろけゆく苦惱くなうの思おもひ。

暮れのこる 邪宗じゃしゆうの御寺みでら

いっしかに薄うすらに青くひらめけば  
 ほのかに薰くゆる沈ちんの香かう、波羅葦ハライソ増のゆめ。  
 さしもまた埋うもれて顛ふるふ妄まうねん念の  
 血ちに染みし踵かかとのあたり、蟋蟀きりぎりす啼なきもすすろぐ。

狂へる椿

ああ、暮ぼしゆん春の。  
 春。

四十一年八月

なべて悩なやまし。

溶とろけゆく雲のまろがり、

大おほぞらのにほひも、ゆめも。

ああ、暮春。

大理なめいし石のまぶしきにはひ——

幾いくもと基ひなたの墓の日向に

照りかへし、

くわと入る光。

ものやはき眩くるめき暈の甘き恐おそれ怖よ。

あかあかと狂ひいでぬる 藪やぶつばき 椿、

自棄やけに熱病ねつやむ霊たまか、見よ、枝もたわわに

狂ひ咲き、

狂ひいでぬる赤き花、

赤き謠言うはごと。

そがかたへなる崖がけの上うへ、

うち湿りしめ、熱りほて、まぶしく、また、ねぶく

大路おほぢに淀むもののおと。

人力車夫じんりきしやふは

ひとつらね 青白あをしろの幌ほろをならべぬ。

客を待つところごころに。

ああ、暮春。

さあれ、また、うちも向へる

いと高く暗き崖がけには、

窓まどもなき牢獄ひとやの壁の

長き列つら、はては閉とざせる

灰はひぐろ黒の重うらもんき裏門。

はたやいま落つる日ひびき、



照りあかる窪地くぼちのそらの

いづこにか、

さはひとり、

湿しめり吹きゆく

幼をさなごころの日のうれひ、

そのちやるめらの

笛ふしの曲。

笛ふしの曲……………

かくて、はた、病やみぬる椿つばき、

赤く、赤く、狂くるへる椿つばき。

吊橋のほひ

夏はげの日の激しき光  
噴ふきいづる銀ぎんの濃雲こくもに照りうかび、  
雲は熔とろけてひたおもて大河筋おほかはすぢに射かへせば、  
見よ、眩暈めくるめく水の面おも、波も真白に  
声もなき潮のさしひき。

四十一年六月

そがうへに懸る吊橋。

すす 煤けたる黝の鉄の桁構、  
ねずみてつ けたがまへ

はんげつけい 半月形の幾円み絶えつつ続くかげに、見よ、  
いくまろ

うす 薄らに青む水の色、あるは煉瓦の  
れんぐわ

まるはしらうつ 円柱映ろひ、あかみ、たゆたひぬ。

ぎんいろ 銀色の光のなかに、

そろひゆく權のなげきしらしらと、  
オオル

あるひほの 或は仄の水鳥のそこしもなき音のうれひ、  
みづとり

かし 河岸の氷室の壁も、はた、ただに真昼の  
ひむろ

はくらふ 白蟻の冷みの沈黙。  
ひや しじま

かくてただ悩む吊橋、

なべてみな真白き水の面、はた、光、

ただにたゆたふ眩暈の、恐怖の、灰の哀愁の

銀の真昼に、色重き鉄のほひぞ

鬱憂に吊られ圧さるる。

鋼鉄のほひに噎び、

絶えずまた直裸なる男の子

真白に光り、ひとならび、力あふるる面して

柵の上より躍り入る、水の飛沫や、

白はつきん金に濡ぬれてかがやく。

真ましろ白なる真まなつ夏の真まひる昼。

汗あせした滴るしとどの熱ねつに薄うすくも曇り、

暈くらみて歎なげく吊橋のにほひ目当めあてにたぎち来る

小蒸こじようきせん汽船の灰はひばめる鈍にぶき唸うなりや、

日は光り、煙うづまく。

硝子切るひと

四十一年八月

君は切る、

色あかき硝子がらすの板いたを。

落日いりひさす暮ぼしゆん春の窓に、

いそがしく撰えらびいでつつ。

君は切る、

金剛こんがうの石のわかさに。

茴香酒アブサンのごときひとすぢ

つと引きつ、切りつ、忘れつ。

君は切る、  
色あかき硝子がらすの板を。

君は切る、君は切る。

悪の窓 断篇七種

四十年十二月

## 一 狂念

あはれ、あはれ、

あをじろ

青白き日の光西よりのぼり、

くれがた

薄暮の灯のほひ昼もまた点りかなしむ。  
とも

わが街よ、わが窓よ、なにしかも焼耐叫び、  
まち  
せうちうさけ

つるはし

鶴嘴のひとつらね日に光り悶えひらめく。  
もだ

汽車ぞ来る、汽車ぞ来る、真黒げに夢とどろかし、  
きしゃ  
きしゃ  
まくろ

窓もなき灰色の貨物輛豹ぞ積みたる。  
はひいろ  
くわもつばこへう



あはれ、はや、せうちう焼酎は醋すとかはり、人は轢しかれて、  
めし盲めしひつつ血へうに叫ぶ豹とほの声遠あわに泡立あわつ。

## 二 疲れ

あはれ、いまあら暴びゆく接吻くちつけよ、肉しむぎよくの曲。  
 ……

かくてはや青白つかく疲れたる獸けものおもての面  
けふ今日もまた我われみす見据みすゑ、果敢はかなげに、いと果敢はかなげに、  
にご色濁まどる窓硝子まどがらす外面のろより呪のろひためらふ。

いづこにかうち狂くるふ牛オロンよ、わが唇くちびるよ、  
 身をも燬やくべき砒素ひその壁かべ夕日さしそふ。

### 三 薄暮の負傷

血潮したたる。

薄くれがた暮たの負傷てきずなやまし、かげ暗くらき溝みぞのほひに、  
 はた、胸むねに、床ゆかなまりの鉛なまりに……

さあれ、夢には列つらなめて駱駝らくだぞ過すぐる。

埃えい及じぶとのカイロの街まちの古煉瓦ふるれんが  
壁のひまには砂漠さばくなるオアシスうかぶ。  
その空にしたたる紅あかきわが星よ。……

血潮したたる。

#### 四 象のほひ

日をひと日。

日をひと日。

日をひと日、光なし、色も盲めしひて

ふくだめる、はた、病やめるなやましきもの

窓ふたぎ窓ふたぎ気け倦だるげに唸うなりもぞする。

あはれ、わが幽いろうつ鬱げの象ざう

亞あ弗ふ利り加かの鈍にぶきにほひに。

日をひと日。

日をひと日。

五 悪のそびら

おどろなす髪あさいろの亜麻色

背そびら向け、今日けふもうごかず、

さあれ、また、絶えずほつほつ

息しぼり『死』にぞ吹くめる、

血のごとき石しやぼん鹼たまの珠を。

## 六 薄暮の印象

うまし接くちつけ吻……  
 歡さざめごと語……

さあれ、空には眼に見えぬ血潮したたり、  
 なにものか負傷ひくるしむ叫び、  
 など痛む、あな薄暮の曲の色、——光の沈黙。

うまし接吻……歡語……

七 うめき

暮れゆく日、血に濁る床の上にひとりやすらふ。  
 街しづみ、窻しづみ、わが心もの音もなし。

載せきたる板硝子いたがらす過ぐるとき車燬やきつつ

落つる日の照りかへし、そが面噎おもてびあかれば

室内むろぬちの汚穢けがれ、はた、古壁に朽ちし鉞まさかり

ひとときはふ一斉に屠らるる牛の夢くわとばかり呻うめき悶もだゆる。

街の子は戯たはむれに空虚うつろなる乳ちの罐くわんたたき、

よぼよぼの飴あめ売うりは、あなしばし、ちやるめらを吹く。

くわとばかり、くわとばかり、

黄きに光むかる向むかひの煉瓦れんぐわ

くわとばかり、あなしばし。——

蟻

おほらかに、

いとおほらかに、

おほ大きな鬱うこん金の色の花の面おも。

日は真昼まひる、

時は極熱ごくねつ、

悪の窓 畢——四十一年二月



ひたおもて日射ひざしにくわつと照りかへる。

時に、われ

世よの蜜みつもとめ

雄ゆう薺ずるの林の底をさまよひぬ。

光の斑ふ

燬やけつ、断ちぎれつ、

豹へうのごと燃もえつつ湿しめる径みちの隈くま。

風吹かず。

仰ふげば空はそら

烈々れつれつと鬱金うこんを篩ふるふ葺ずみの花。

さらに、聞く、

爛ただれ、饅すえばみ、

ふつつつと苦痛くつうをかもす蜜の息。

樂欲げうよくの

極みか、甘き

寂じやくまく寞まくの大だい光くわうみやう明みやう、  
に喘あへぐ時。

人界にんがいの

七谷ななたにへだ隔て、

丁々とうとうと白檀びやくだんを伐つをの斧おとの音。

華のかげ

時ときは夏、血にのごと濁るどくする毒水どくすゐの

鰐住わにむ沼ぬまの真昼まひるどき時、夢ともわかず、

日になげ嘆くむりやう無量むりやうの広葉ひろはかきわけて

四十年三月

ほのかに青き青蓮せいれんの白華しらはな咲けり。

ここ過ぎり街まちにゆく者、——

婆羅門ぼらもんの苦行くぎやうの沙門しゃもん、あるはまた

なまかわあさ 生皮なまかわあさ漁る旃陀羅せんだらが鈍にぶき刃はの色、

たまたまに火きの布きれ巻ける奴隸しもべども

石油せきゆの罐くわんを地なに投なげて鋭すどに泣なけど、

この旱ひでり何時いつかは止やまむ。これやこれ、

饑うゑに墮おちたる天竺てんぢくの末期まつごの苦患くげん。

見るからに気候きこう風吹ふうく空そらの果はて

銅あかがね色いろのうろこ雲しめり湿潤りもに燃もえて

ガンヂス  
 恒河の鱒の脊のごとはらばへど、  
 日は爛れ、大地はあはれ柚色の  
 熱黄疸の苦痛に吐息も得せず。

この恐怖何に類へむ。ひとみぎり

地平のはてを大象の群御しながら

槍揮ふ土人が昼の水かひも

終へしか、消ゆる後姿に代れる列は

こは如何に殖民兵の黒奴らが

喘ぎ曳き来る真黒なる火薬の車輻

掲ぐるは危嶮の旗の朱の光

絶えず饑<sup>う</sup>ゑたる心<sup>しん</sup>臓<sup>ざう</sup>の呻<sup>うめ</sup>くに似たり。

さはあれど、ここなる華<sup>はな</sup>と、円<sup>まろ</sup>き葉の

あはひにうつる色、匂<sup>にほひ</sup>、青みの光、

ほのほのと沼<sup>ぬま</sup>の水面<sup>みのも</sup>の毒の香も

薄<sup>うす</sup>らに交<sup>まじ</sup>り、昼<sup>ひる</sup>はなほかすかに顛<sup>ふる</sup>ふ。

幽閉

四十年十二月

色濁るぐらすの戸もて

封じたる、白日の日のさすひと間、

そのなかに蟻のあかりのすすりなき。

いましがた、蓋閉したる風琴の忍びのうめき。

そがうへに瞳盲ひたる嬰兒ぞ戯れあそぶ。

あはれ、さは赤裸なる、盲ひなる、ひとり笑みつつ、

声たてて小さく愛しき生の臍をまさぐりぬ。

物病ましさのかぎりなる室のといきに、

をりをりは忍び入るらむ戯けたる街衢の雛子、

あはれ、また、みどりご嬰兒笑ふ。

ことごとと、ひそかなる母のおとなひ

いくたび幾度となく戸を押せど、はてはたた敲けど、

色濁る扉はあかず。

むろうち室の内暑くいふせ悒鬱く、またさらにみどりご嬰兒笑ふ。

かくて、はた、がらす硝子のなかのすすりなき

らふ蠟のあかりの夜を待たずよ尽きなむ時よ。

あはれ、また母のうれひ愁の恐怖とならむそのみぎり。



あはれ、子はひたに聴き入る、  
 珍めづらなるいと可を笑かしきちやるめらの外そとの一ひと節ふし。

## 鉛の室

いんきは赤し。——さいへ、見よ、室むろの腐蝕ふしよくに  
 うちにじみ倦うんじつつゆくわがおもひ、  
 暮ぼし春ゆんの午後ごごをそこはかと朱しゆをば引ひけども。

四十一年六月

油じむ末黒すぐろの文字もじのいくつらね

悲しともなく誦ずしゆけど、響ひびらぐ声こゑは

鏽さびてゆく鉛なまりくやみの悔なまりくやみ、しかすがに、

強つよくき薫くゆりのなやましき、鉛なまりの室むろは

くわとばかり火ウオツカ酒ウオツカのごとき噎むせびして

壁しめりの湿润しめりを玻璃はりに蒸いたす光いたの痛いたさ。

ちから ちから ちから  
力ちからなき活くわつじ字くわつじひろひの淫たはれ歌うた、

病やめる機き械かいの羽はたたきにあるは沁こみ来こし

新あたらしき紙あの刷すられの香かも消きゆる。

いんきや尽きむ。——はやもわがこころのそこに  
 聴くはただ饴すえに饴すえゆく匂にほひのみ、——  
 はた、滓をりよどむ壺つぼを見よ。つとこそ一人ひとり、

手を棚たなへ延のすより早く、とくとくと、  
 赤がらすき硝子のいんき饴びかた傾たむけそそぐ  
 一刹いつせつな那つぼ、壺つぼにあふるる火のゆらぎ。

さと燃もえあがる間まこそあれ、翻かへると見れば  
 手に平ひらむ吸す取とり紙がみの骸かばね色いろ

爛れぬ——あなや、血はしと、と卓に滴る。

四十年九月

真昼

日は真昼——野づかさの、寂寥の心の臓にか、  
ただひとつ声もなく照りかへす硝子の破片。

そのほとり WHISKY 《ウヰスキイ》の匂蒸す銀色の内、  
声するは、密かにも露吸ひあぐる、  
色赤き、色赤き花の吐息……

四十一年十二月



四十年八月、新詩社の諸友とともに遠く天草島に遊ぶ。こはその

### 天草雅歌

このさんたくるすは三百年まへより大江村の切支丹の  
うちに忍びかくして守りつたへたるたつときみくるす  
なり。これは野中に見いでたり。

天草島大江村天主堂秘蔵

紀念作なり。

「四十年十月作」



## 天艸雅歌

## 角を吹け

わが佳耦ともよ、いざともに野にいでて

歌はまし、水牛すゐぎうの角つのを吹け。

視よ、すでに美果実みくだものあからみて

田にはまた足穂たりほ垂れ、風のまに

山鳩のこゑきこゆ、角つのを吹け。

いざさらば馬鈴薯ばれいしょの畑はたを越え

瓜哇ジャワびとが園に入り、かの岡に

鐘やみて蠟ろうふの火の消ゆるまで

無花果いちじゆくの乳ちをすすり、ほのぼのと

歌はまし、汝なが頸くびの角つのを吹け。

わが佳耦ともよ、鐘きこゆ、野に下りて

葡萄樹じゆの汁滴つゆしたる邑むらを過ぎ、

いざさらば、パアテルの黒けき袈裟さ

はや朝つとめの看経つとめはて、しづしづと

見えがくれ棕櫚しゆろの葉はに消ゆるまで、

無花果いちじゆくの乳ちをすすり、ほのぼのと

歌はまし、いざともに角つのを吹け、

わが佳耦ともよ、起き来れ、野にいでて  
 歌はまし、水牛すゐぎうの角つのを吹け。

ほのかなる蠟の火に

いでや子ら、日は高し、風たちて  
 棕櫚しゆろの葉のうち戦そよぎ冷ひゆるまで、  
 ほのかなる蠟ろうの火に羽はをそろへ  
 鳩はとのごと歌はまし、汝なが母も。  
 好よき日なり、媪おうなたち、さらばまづ  
 禱いのらまし賛美歌さんびかの十五番じふごばん、

いざさらば風琴オルガンを子らは弾け、

あはれ、またわが爺おぢよ、なにすとか、

老眼鏡おいめがねここにこそ、座ざはあきぬ、

いざともに禱いのらまし、ひとびとよ、

さんた・まりや。さんた・まりや。さんた・まりや。

拝をろがめば香炉かうろの火身に燃えて

百合のごとわが霊たまのうちふるふ。

あなかしこ、鴿はとの子ら羽はをあげて

御龕みづしなる蠟ろうふの火をあらためよ。

黒船くろふねの笛きこゆいざさらば

ほどもなく。パアテルは見えまさむ、

さらにまた他の燭そくをたてまつれ。

あなゆかし、ロレンゾか、鐘鳴らし、

まめやかに安息あんそくの日を祝ほぐは、

あな楽し、真白ましろなる羽をそろへ

鳩はとのごと歌はまし、わが子はとらよ。

あはれなほ日は高し、風たちて

棕櫚しゆろの葉のうち戦そよぎ冷ひゆるまで、

ほのかなる蠟ろうふの火に羽をそろへ

鳩はとのごと歌はまし、はらからよ。

を抜けよ

はやも聴け、鐘鳴りぬ、わが子らよ、

御堂みだうにははや夕よべの歌きこえ、

蠟ろうふの火もともるらし、ろを抜ぬけよ。

もろもろの美果みくだもの実籠こに盛りて、

汝ながはと鳩はとら烟はたに下り、しらしらと

帰かへるらし夕ゆふづつのかげを見よ。

われらいま、空そらいろ色ほの帆ほのやみに

新あらたなる大海おほうみの香炉かうろ採とり

籠こに炷たきぬ、ひるがへる魚を見よ。

さるほどに、跪かき、ひとびとは

目見青き まみ 上 しやうにん 人と夜に いの 禱り、

捧げます御 み くるすの香 か にや酔ふ、

うらうらと咽ぶらし、歌をきけ。

われらまた祖 みおや 先らが血によりて

洗 そそ 礼がれし仮 かなぶみ 名文の御 みきやう 経にぞ

主 しゆう よ永久に恵みあれ、われらも、と

鴿 はとみ 率 はとみ つつ禱らまし、帆をしぼれ。

はやも聴け、鐘鳴りぬ、わが子らよ、

御 みだう 堂にははや夕 よべ の歌きこえ、

蠟 らふ の火もくゆるらし、 ろ を抜けよ、

## 汝にささぐ

をみなご  
女子よ、

な ささぐ  
汝に捧ぐ、

ただひとつ。

しか  
然はあれ、 汝も知らむ。

このさんた・くるすは、かなた

びろうじゆ  
檳榔樹の實の落つる国、

ゆふひ  
夕日さす 白瑛瑯の石の階

そのそこの心の心、——



えめらるど、あるは紅玉、

褐くりの埴はにやちさか八千層敷ける真底まそこより、

汝なが愛を讃たたへむがため、

また、清き接吻くちつけのため、

水晶の柄えをすげし白銀しろかねの鍬くわをもて、

七つほど先さきの世よゆ世を継つぎて

ひたぶるに、われとわが

採とりいでし型かた、

その型かたを

汝なに捧ささぐ、

女子をみなごよ。

ただ秘めよ

いひけるは、

あな、わが少女、をとめ

天あまくさ艸みつの蜜みつの少女をとめよ。

汝なが髪からすは烏からすのごとく、

汝なが唇くちは木この実みの紅あけに没もつやく薬やくの汁しゆ滴たらす。

わがはと鳩はとよ、わが友ともよ、いざいざともに擁いだかまし。

薫くゆり濃りき葡萄ぶどうの酒さけは

玻璃の壺ぎやまんつぼに盛もるべく、  
 もたらしし麝香じゃかうの臍ほぞは  
 汝なが肌の百合なに染めてむ。  
 よし、さあれ、汝なが父なに、  
 よし、さあれ、汝なが母なに、  
 ただ秘ひめよ、ただ守いっれ、齋いっき死ぬまで、  
 虐しひたげの罪しもとの鞭しもとはさもあらばあれ、  
 ああただ秘ひめよ、御みくるすの愛あいの徴しるしを。

さならずば

わが家の

わが家の可愛ゆき鴿を

その雛を

汝せちに恋ふとしならば、

いでや子よ、

逃れよ、早も邪宗門外道の教

かくてまた遠き祖より伝へこし秘密の聖蹟

とく柱より取りいでよ。もし、さならずば

もろもろの麝香のふくろ、

桂枝、はた、没薬、蘆薈

および乳ちち、島いの無花果ちゆく、

如何いかにに世よのにほほひひを積たむも、——

ささなららずずば、

ももししささなららずずば——

汝なれいいかかに陳ちんじ泣なくくととも、ああるるは、ままた

護ご摩また炷たき修しゆし、伴ば天てん連れんの救すくよよぶぶととも、

ああああ遂すに詮せん業ぎやうななけけむ。いいぎぎささららば

接くち吻つけの妙たへなる蜜みつに、

女を子みなごの葡ぶ萄たうの息いきに、

いいで『ころころべ』いいぎぎ歌かへ、わわかかううどどよ。

## 嗅煙艸

『あはれ、あはれ、  
深江ふかえの媼おばよ。

髪ほも頬たばこいろも煙艸色なる、

棕櫚しゆろの根うづくに蹲おぼむ媼よ。

汝なが持ぎてる象牙ざうげの壺つぼは

また薰くゆる褐くりなる粉こなは

何なぞ。また、せちに鼻はなつけ

涙なみだ垂たれ、あかき眼め擦するは。』

このときに渡わたりのおうなおなの媼おな

呻によぶらく。『わが葡萄ほるとがる牙、

こを嗅かぎてわかきは思かふ。』

『さらば、汝なは。』『責せめそ、さな、さな、  
養生やしなひを骸からはただ欲ほれ。

さればこそ、この嗅かぎ煙たばこ艸。』

## 鵠

わかうどなゆめ近ちかよりそ、

かのゆくは邪じゃ宗しゅうの鵠くぐひ、

日のうちにななたび七度八度やたび

潮あびうしほ化粧けはひすといふ

伴天連ばてれんの秘ひその少女をとめぞ。

地ちになびく髪かみには蘆あし薈わい、

嘴はしにまたあかき実みを塗ぬる

淫みだらなる鳥とりにしあれば、

絶たえず、その真ま白しろ羽はひろげ

乳にふかう香かうの水みづしたたらす。

されば、子こなゆめ近ちかよりそ。

視みよ、持もつは炎ほのほか、華はなか、

さならずば実みの無い花ち果くか、



と  
 兎にもあれ、かれこそ邪法じゃはふ。  
 わかうどなゆめ近よりそ。

日ごとに

日ごとにわかき姿すがたして  
 日ごとに歌ふわが族ぞうよ、  
 日ごとに紅あかき実みの乳房ちぶさ  
 日ごとにすてて漁あさりゆく。

## 黄金向日葵

あはれ、あはれ、黄金向日葵こがねひぐるま  
みまし 汝また太陽にも倦あきしか、  
なんごく 南国の空の真昼まひるを  
 かなしげに疲つかれて見ゆる。

## 一炷

かうろ  
香炉いま

いつす  
一炷のかをり。

あはれ、火はこころのそこに。

さあれ、その

いつす  
一炷のけむり、

そら  
かの空の青き龕みづしに。



## 青き花

南紀旅行の記念として且はわが羅曼底時代のあえかなる思出のため、この幼き一章を過ぎし日の友にささぐ。

「四十年二、三両月中作」

青き花

そは暗<sup>くら</sup>きみどりの空に  
むかし見<sup>まほろし</sup>し幻なりき。

青き花

かくてたづねて、  
日も知らず、また、夜<sup>よ</sup>も知らず、  
国あまた巡<sup>めぐ</sup>りありきし  
そのかみの  
われや、わかうど。

そののちも人とうまれて、

微妙いみじくも奇くしき幻まぼろし

ゆめ、うつつ、

香かこそ忘れね、

かの青き花をたづねて、

ああ、またもわれはあえかに

人ひとの世よの

旅路たびぢに迷ふ。

君

かかる野に

何時いつかありけむ。

仏手柑ぶしゆかんの青む南なんごく国

薫かをる日の光なよらに

身をめぐりほめく物の香か、

鳥うたひ、

天そらもゆめみぬ。



何時いつの世か

君と識しりけむ。

黄金こがねなす髪もたわたわ、

みかへるか、あはれ、つかのま

ちらと見ぬ、わかき瞳ひとみに

にほひぬる

かの青き花。

桑名

夜よとなりぬ、神世かみよに通ふやすらひに

早かどとぎや門鎖かどとぎす古伊勢ふるいせの桑名くわなの街まちは

路みちも狭せに高き屋やづくり音おともなく、

陰いんしん森として物の隈くまひろぐるにほひ。

おほらかに零落れいらくの戸かどを瞰下みおろして

愁うれふるがごと月光げつくわうは青に照せり。

参宮さんぐうの衆しゅうにかあらむ、旅たびびとの

ふたりみたり二人三人はさきのほどひそかに過すぎぬ。

貸旅籠かしはたぎ札ふだのみ白き壁つづき

ほとほと遠く、物ものごゑの夜風よかぜに消えて、

今ははた数かず添そはりゆく星くづの

天そらなる調しらべやはらかに、地ふは闌ふけまさる。

時まじになほ街まちはづれなる老舗しにせの戸

少あかし明ありて火みちは路みちへひとすぢ射さしぬ。

行あんどう燈あのかげには清めき女めの童物わらわ縫ぬふけはひ、

そがなかにたわやの一人ひとり髪あげて

戸外とのもすかしぬ。——事こともなき夜よのしづけさに。

朝

——汽車のなかにて——

わが友よ、はや眼めをさませ。

玻璃はりの戸ひにのこる灯ひゆらぎ、

夜よはわかきうれひに明けぬ。

順礼はつとにめざめて

あえかなる友をかおもふ。

清すずしげの髪かみのそよぎに

笈おひづるのいろもほのぼの。

わが友よ、はや眼めをさませ。

かなた、いま白<sup>しら</sup>む野のそら、  
薔薇<sup>さうび</sup>にはほのかに薄<sup>うす</sup>く  
董<sup>こ</sup>よりやや濃<sup>こ</sup>きあはひ、  
かのわかき瞳<sup>ひとみ</sup>さながら  
あけぼのの夢より醒<sup>さ</sup>めて  
わだつみはかすかに顛<sup>ふる</sup>ふ。

## 紅玉

かかるとき、

海ゆく船に

まどはしの人魚にんぎよか蹤つける。

美しくしき術じゆつの夕ゆふべに、

まどろみの香油かうゆしたたり、

こころまた

けぶるともなく、

まぼろし幻まぼろしの黒髪まほろしきたり、

夜よのごとも

わが眼蔽めおほへり。

そことなく

おほくのひとの

あえかなるかたらひおぼえ、  
われはただひしと凝視<sup>みつ</sup>めぬ。

夢ふかき黒髪<sup>おく</sup>の奥

朱<sup>しゆ</sup>に喘ぐ

紅<sup>こうぎよく</sup>玉ひとつ、

これや、わが胸より落つる

わかき血の

もゆしたたり  
燃る滴。

海辺の墓

われは見き、

いつとは知らね、

薄<sup>うす</sup>あかるにほひのなかに

夢ならずわかれし一人<sup>ひとり</sup>、

ものみなは涙のいろに

消えぬとも。

ああ、えや忘る。

かのわかき黒髪のなか、

星のごと濡れてにほひし

そらいろ<sup>まがたま</sup>の勾玉七つ。



われは見ぬ、

漂浪さすらひながら、

見もなれぬ海辺の墓に

うつつにも眠れる一人ひとり

そことなき髪のにほひの

ほのめきも、

ああ、えや忘る。

いま寒き夕ゆふやみ闇のそこ、

星のごと濡れてにはへる

天そらいろ色の露つゆくさ草七つ。

## 渚の薔薇

紀きの南みなみ、白良しららの渚なぎさ、

荒あき灘なだ高たかく碎くだけて

天そら暗くらう轟とどろくほとり、

ひとならび夕陽ゆふひをうけて

面おもほてり、むらがり咲ける

色あか紅さうびき薔薇ぞうの族ぞうよ。

瞬またたく間ま、間近まぢかに寄せて

崩れなだうつ浪の穂を見よ。

今しさと滴したたるばかり

激瀾おほなみの飛沫しぶきに濡れて、

弥いやさらに匂ひらひ閃めく

火のごとき少女をとめのむれよ。

寄せ返し、遠く消えゆく

塩しほなわ漚な暗ねき音を聴け。

ああ薔薇さうび、汝なれにむかへば

わかき日のほこりぞ躍る。

薔薇さうび、薔薇さうび、あてなる薔薇さうび。

## 紐

海の霧にほやかなるに  
灯<sup>ひ</sup>も見ゆる夕暮のほど、  
ほのかなる旅籠<sup>はたご</sup>の窓に  
在<sup>あ</sup>るとなく暮<sup>く</sup>れもなやめば、  
やはらかき私<sup>ささやき</sup>語まじり  
咽<sup>むせ</sup>びきぬ、そこはかとなく、  
火に焼くる薔薇<sup>さうび</sup>のほひ。

ああ、薔薇さうび、暮れゆく今日けふを

そぞろなり、わかき喘あへぎに

図はからずも思ひぞいづる。

そは熱あつき夏の渚なぎさ辺へ、

濡ぬれ髪がみのなまめかしさに、

女をみなつと寝ねがへりながら、

みだらなる手して結びし

色あかくつしたひも紅かき鞭むちの紐ひも。

蜜柑船みかんぶね風なぎにうかびて

壁白き浜のあなたは

あたたかに物売る声す。

波もなき港の真昼まひる、

白銀しろがねの挿櫛さしぐし撓たはみ

いま遠く二つら三つら

水の上へをすべると見つれ。

波もなき港の真昼、

また近く、二つら三つら

飛とびの魚いしすべりて安やすし。

## 夕

あたたかに海は笑ひぬ。  
わら

花あかき夕日の窓に、

手をのべて聴くとしもなく

薔薇さうびつ摘み、ほのかに愁うれふ。

いま聴くは市いちの遠音とほねか、

波の音ねか、過ぎし昨日きのふか、

はた、淡あはき今日けふのうれひか。

あたたかに海は笑ひぬ。

ふと思ふ、かかる夕日に

しろがねすずしの絹衣ゆるがせ、

いまあてに花摘みながら

かく愁うれひ、かくや聴きくらむ、

くれなるなんきよくせいか  
紅なの南極星下

われを思ふ人のひとりも。

羅曼底の瞳



この少女はわが稚きロマンチックの幻象也、  
 仮にソフィヤと呼びまゐらす。

美しくしきソフィヤの君。

悲しくも恋しくも見え給ふわがわかきソフィヤの君。

なになれば日もすがら今日はかく瞑目り給ふ。

美しくしきソフィヤの君、

われ泣けば、朝な夕なに、

悲しくも静かにも見ひらき給ふ青き華——少女の瞳。

ソフィヤの君。



## 古酒

こは邪宗門の古酒なり。近代白耳義の所謂フアンドシエクルの神経には柑桂酒の酸味に豎笛の音色を思ひ浮かべ梅酒に喇叭を嗅ぎ、甘くして辛き茴香酒にフルウトの鋭さをたづね、あるはまたウヰスキイをトロムボオンに、キユムメル、ブランデーを嚙喰として鼻音を交へたるオボイの響に配して、それぞれ匂強き味覚の合奏に耽溺すと云へど、こはさる驕りたる類にもあらず。黴くさき穴倉の隅、曇りたる色硝子の窓より洩れきたる外光の不可思議におぼめきながら煤びたるフラスコのひとつに湛ゆるは火酒か、阿刺

吉か、又はかの紅毛の※酩の酒か、えもわかねど、われはただ和蘭わたりのびいどろの深き古色をゆかしみて、かのわかき日のはじめに秘め置きにたる様々の夢と匂とに執するのみ。

## 恋慕ながし

春ゆく市のゆふぐれ、  
 角なる地下室の玻璃透き

うつらふ色とにほひと

見惚れぬ。——潤るむ笛の音。

しばしは雲の縹と、

灯うつる路の濡色、

また行く素足しらしら、——

あかりぬ、笛の音色も。

古き醋甕すがめと街衢ちまたの

物焼く薰くゆりいつしか

薄らひ饘すゆれ。——澄みゆく

紅あかき音色ねいろの揺曳ゆらびき

このとき、玻璃はりも真黒まくろに

四輪車しりんしやきし軋るはためき、

獣けものの温ぬるき肌はだの香か

過ぎりぬ。——濁にごる夜よの色。

ああ眼めにまどふ音色ねいろの

はやも見わかぬかなしさ。

れんほ、れれつれ、消えぬる

恋慕れんぼながしのひとつし一曲。

煙草

黄きのほてり、夢のすががき、

四十年二月

さはあまきうれひの華はなよ。

ほのに汝なを嗅かぎゆくこころち、

QRACIO 《キユラソオ》の酒もおよばじ。

いつはあれ、ものうき胸に

痛いた知るささやきながら、

わかき火のにほひにむせて

はばたきぬ、快楽けらくのうたは。

そのうたを誰かは解とかむ。

あえかなる罪のまぼろし、——



濃こき華くのり褐くに沁しみゆく  
 愛あい欲よくのち千ぢ々のうれれひを。

向ひ日ぐる葵まのま日まに蒸すにほひ、  
 かはたれのかなしきか怨ごと言こと

ゆるやかかにくゆりぬ、いまも  
 絶た間えなまきま火まのまさまさまやまきまに。

かくたてわたがたこころこひひねねももす  
 傷いたむむととももななくくててくくゆゆりりぬ、

ああな、ああははれ、汝ながが香かのの小こ鳥と

そらいろのもやのつばさに。

舗石

夏の夜<sup>よ</sup>あけのすずしき、

氷載せゆく車の

いづちともなき<sup>きしり</sup>軌に、

潤<sup>うる</sup>みて消ゆる<sup>がす</sup>瓦斯の火。

四十年九月

海へか、路次ろじゆみだれて

おほうから  
大族おほうからなす鷺がの鳥

鳴きつれ、霧のまがひに

わたりぬ——しらむ舗石しきいし。

人みえそめぬ。煙草たばこの

ただよひ湿しめるたまゆら、

迂えなる窓の絵硝子えがらす

あがりぬ——ひびく舗石しきいし。

見よ、女めが髪かみのたわめき

濡れこそかかれ、このとき

つと寄り、男、みだらの

接吻くちつけ——にほふ舗石しきいし。

ほど経て窓を閑さす音おと。

枝垂柳しだれやなぎのしげみを、

赤き港の自働車じどうしや

けたたましくも過すぎぬる。

ややあり、ほのに緋ひの帯、

水色うつり過すぐれば、

纏もつれぬ、はやも、からころ、  
 かるき木履きくつのすががき。

驟雨前

長なが月つきの鎮守ちんじゆの祭まつり

からうじてどよもしながら、  
 雨あめもよひ、夜よもふけゆけば、  
 蒸こしなやむ濃こき雲のあし

四十年九月

をりをりに赤<sup>あか</sup>くただれて、  
月あかり、稲<sup>いなづま</sup>妻すなる。

このあたり、だらだらの坂<sup>さか</sup>、

赤楊<sup>はん</sup>高き小学校の

柵<sup>さく</sup>尽きて、下<sup>した</sup>は黍<sup>きび</sup>畑<sup>ばた</sup>

こほろぎぞ闇に鳴くなる。

いづこそや女<sup>をみなごゑ</sup>声<sup>こゑ</sup>して

重<sup>あまどく</sup>たげに雨戸<sup>あまどく</sup>繰<sup>おと</sup>る音。

わかれ路<sup>みち</sup>、辻<sup>つじ</sup>の濃霧<sup>こぎり</sup>は

馬やどののこるあかりに

幻燈げんとうのぼかしのごとも

蒸あをし青み、破やれし土馬車つちばしや

ふたつみつ泥どろにまみれて

ひそやかに影おとを落しぬ。

泥ぬかるみ 凜あせの物の汗ばみ

生なまぬるく、重くうきき空氣に

新もくせいしき木犀まじり、

馬槽うまぶねの臭くさみ気ふけつつ、

懶ものうげのさやぎはたはた

暑あつき夜よのなやみを刻きざむ。

あしおと  
足音す、  
なまち  
生血の滴り

しとしととまへを人かげ、

おちうどか、ほたや、  
ろくぶ  
六部か、

せ  
背に高き龕をになひ、

青き火の消えゆくごとく

うめ  
呻きつつ闇にまぎれぬ。

なまさや  
生騒ぎ野をひとわたり。

え  
とある枝に蝉は寝おびれ、

なげ  
ちと嘆き、  
鳴きも落つれば



ほらまろ  
洞円ほらまろき橋はし台だいのをち、

はつかにも断きれし雲間くもまに

月黄きばみ、病わらめる笑わらひす。

夜よの汽車の重きとどろき。

凄しまじき驟しゅう雨うのまへを、

くろけぶりふかはざま  
黒くろ烟けぶり深ふかき峽はざまは

いちめん  
一いち面めんに血潮ながれて、

いま赤く人し轢しくけしき。

稲妻いなづます。——嗚呼あゝ夜よは一時いちじ。

## 解纜

解纜す、大船あまた。――

ここ肥前長崎港のただなかは

長雨ぞらの幽闇に海づら鈍み、

悶々と櫓けぶるたたずまひ、

鎖のむせび、帆のうなり、伝馬のさけび、

あるはまた阿蘭船なる黒奴が

気も狂ほしき諸ごゑに、硝子切る音、

うち湿り――嗚呼午後七時――ひとしきり、

落居ぬ騒擾。

解纜す、大船あまた。

あかあかと日暮の街に吐血して

落日喘ぐ寂寥に鐘鳴りわたり、

陰々と、灰色重き曇日を

死を告げ知らすせはしさに、響は絶えず

天主より。——闇澹として一一列、

海波の嗚咽、赤の浮標、なかに黄ばめる

帆は瘡に——嗚呼午後七時——わなわなとはためく恐怖。

解纜す、大船あまた。——

わうはつ ばてれんしんとさうらう  
 黄髪の伴天連信徒蹠跟と

あんけつだう はりき  
 闇穴道を磔負ひ駆られゆくごと

なま くやみうなりぎつぎ  
 生ぬるき悔の唸順々に、

くろけぶ どうえう  
 流るる血しほ黒煙り動揺しつつ、

なんぼん めど  
 印度、はた、南蛮、羅馬、目的はあれ、

しやうがい よみ  
 ただ生涯の船がかり、いづれは黄泉へ

ああ うついう  
 消えゆくや、——嗚呼午後七時——鬱憂の心の海に。

三十九年七月

日ざかり

嗚呼、あゝ今いまし午砲ごほうのひびき

おほどかにとどろきわたり、  
をちこち遠近きてきの汽笛きてきしばらく

饑ううるごと呻うめきをはれば、

柳やなぎはらあつ原ちまた熱あつき街衢ちまたは

また、もとの沈黙しじまにかへる。

河岸かしなみは赤れんぐわき煉瓦わや家。

牢獄ひとやめく工場こうばの奥おくゆ

印刷いんさつの響ひびきたまたま

薄鉄葉切はりきる鋏はさみの音おとと、

枢ひつぎうつ槌やすりと、

懶ものうげにまじりきこえぬ。

片側かたかはの古衣屋ふるぎやつづぎ、

衣紋掛えもんかけ重おそれき恐怖おそれに

肺はひやみの咳しはふき洩おそれて、

饘すえてゆく物のいきれに、

陰湿いんしつのにほひつめたく

照しらり白しろみ、人もくざは黙坐もくざす。

ゆきかへり、やをら、でんきしや電気車

なまり鉛だつたい体をとどめて

ぐどぐどとかたみに語り、

うついうなり鬱憂の唸重げに

またきし軋る、あつ熱く垂れたる

ひたあか赤きまんゐん満員ふだの札。

恐ろしきしじま沈黙ふたたび

こくねつ酷熱の日ざしにただれ、

ぺんきぬりさ塗褪めしかんばん看板

どくた毒滴らし、かし河岸のあちこち

ちぢれ毛げの瘦やせいぬ犬見えて

苦しげくるに肉にくを求食あさりぬ。

油あぶらうく線路レエルの正面まとも、

鉄重てつおもき橋かまへの構かまへに

雲ひとつまろがりいでて

くらくらとかがやく真昼まひる、

汗あせながし、車曳ひきつつ

匍匐はふがごと撒水みづまき夫まきたる。

三十九年九月



## 軟風

ゆるびぬ、潤うるむ罌粟けしの火は  
 わかき瞳ぬれいろの濡色いろに。  
 熟視みつめよ、ゆるる麦の穂の  
 たゆらの色のつぶやきを。

たわやになびく黒髪くろかみの  
 君の水脈みこそ身に翻あふれ。――  
 うかびぬ、消えぬ、火しづくの雫  
 匂におの海のたゆたひに。

ふとしも歎なげく蝶のむれ  
 ころりんころと……頬ほのほめき、  
 触ふる吐息といきに纏もつるれば、  
 色も、にほひも、つぶやきも、

同じ音色ねいろの揺曳ゆらびきに

倦うんじぬ、かくて君が目も。——  
 あはれ、皐月さつきの軟風なよかぜに  
 ゆられてゆめむわがおもひ。

## 大寺

おほてら  
大寺の庫裏くりのうしろは、

枇杷こがねあまた黄金こがねたわわに、

六月そらの天そらいろ洩そらるる

路次ろじの隅さ、竿さをかけわたし

皮交り、襦袢むつきを乾ほせり。

そのかげに穢むさき姿なりして

面子めんこうち、子らはたはぶれ、

裏店うらだなの洗流ながしの日かげ、

顔青き野師やしの女房ら

首いだし、煙草吸ひつつ、

鈍にぶき目に蕘いらかあふぎて、

はてもなう罵りかはす。

凋しをれたるものものにほひは

溝どぶ板いたの臭くさ気みまじりに

蒸あつし暑あつく、いづこともなく。

赤黒き肉屋の旗は

屋根越に垂れて動かず。

はや十時、街まちの沈しじま黙まを

しめやかに沈ちんの香しづみ、

しらじらと日は高まりぬ。

三十九年八月

ひらめき

十月じふぐわつのとある夜よの空。

北国ほつこくの郊野かうやの林檎

実みは赤く梢こすゑにのこれ、

はや、里くだものとりの果物採は

影絶えぬ、遠く灯ひつけて

ただ軋きしる耕かうさく作さくぐるま。

鬱憂うついうに海うみは鈍にばみて

闇澹あんたんと氷雨ひさめやすらし。

灰濁はひだめる暮雲ぼうんのかなた

血紅けつこうの火花ひばなひらめき

燦さんとして音おとなく消えぬ。

沈痛ちんつうの呻吟うめきこの時、

闇重やんじゆうき夜やしよく色のなかに

蓬髮ほうはつの男跽よろめ跟き

落らくる涙なみだす、蒼あをしろ白しろき頬ほに。

## 立秋

憂いうしう愁しうのこれや野の国、

柑子かうじだつ灰色のすゑ

夕汽車ゆふぎしやの遠音とほねもしづみ、

信号柱シグナルのちさき燈ともしび

淡々あはあはとみどりにうるむ。

ひとしきり、小野をのに細雲ほそぐも。

南瓜畑かぼちやばた北へ練ねりゆく

旗赤き異形みぎやうの列れつは  
 戯おどけたる広告ひろめの囃子はやし  
 賑にぎやかに遠くまぎれぬ。

うらがなし、落日いりひの黄金こがね  
 片岡かたおかの槐えんじゆにあかり、  
 鳴きしきる蝸かなかな、あはれ  
 誰葬たねはふるゆふべなるらむ。

三十九年八月



玻璃罍

うすぐらあなぐらき窖なのなか、

ひひさこなり

瓢た状た、なにか湛たへて、

とを

まろ

十あまり円まうならべる

夢ゆめいろの薄うすら玻璃罍はりびん。

静しづけさや、霽もやの古ふるびを

黄わう蠟らふは燻くゆりまどかに

照ありあかる。吐とい息きそこ、ここ、

哀あい楽らくのつめたきにほひ。

いま  
今しこそ、ゆめの 歡くわん樂らく  
ふ  
降りそそげ。生命いのちの脈なみは

ゆらぎ、かつ、壁にちらほら

はりす  
玻璃透きぬ、赤き火の色。

微笑

ろうげつ  
朧月か、まば  
眩ゆきばかり

三十九年八月

髪むすび紅あかき帯して

あらはれぬ、春夜しゅんやの納屋なやに

いそいそと、あはれ、女子をみなご。

あかあかと据すゑし蠟燭らふそく

薔薇潮さうびさす片頬かたほにほてり、

すずろけば夜霧火よぎりのごと、

いづこにか林檎りんごのあへぎ。

嗚呼ああ愉快ゆらく、朱塗しゆぬりの樽たるの

差口さぶす抜き、酒つぐわかさ、

ぎやまん  
 玻璃器こしゆに古酒かをりかの薫香

なみなみと……遠く人ごゑ。

やや暫時しばし、瞳かがやき、

髪かしげ、微笑ほほゑみながら

なに紅あかむ、わかき女子をみなご。

母屋もやにまた、おこる歡語さざめき……

砂道

三十九年八月

日の真昼まひる、ひとり、懶ものうく

真白さだうなる砂道さだうを歩む。

市いち遠く赤き旗見ゆ、

風もなし。荒蕪かうぶち地つづき、

廃すたれ立つ礎燃いしずゑえて

烈れつ々れつと煉れん瓦ぐわの火くわ氣きに

爛ただれたる果実くわじつのにほひ

そことなく漂ただよめ湿める。

数百歩、娑婆しゃばに音なし。

ふと、空に苦熱くねつのうなり、

見あぐれば、名しらぬ大樹たいじゆ

千ち万よろづの羽音はとおとに靡しけ、

鈴すず状なりに熟うるる火の粒

潤しめやかに甘ちき乳ちしぶく。

楽げう欲よくの渴かわたちまち

かのわかき接くち吻つけ思ひひ、

目くらぞ暈むむ。

真夏の原に

真白なる砂道とぎれて  
 また続く恐怖の日なか、  
 寂として過ぎる人なし。

凋落

寂光土、はたや、墳塋、  
 夕暮の古き牧場は  
 なごやかに光黄ばみて

三十九年八月

うつらちる楡にれの落葉らくえふ、

そこ、かしこ。——暮秋ぼしゅうの大日おほひ

あかあかと海に沈めば、

凋落てうらくの市いちに鐘鳴り、

絡繹らくえきと寺門じもんをいづる

老若らうにやくの力ちからなき顔、

あるはみな青き旗垂れ

灰濁はひだめる水路すゐろの靄すゐろに

寂寞じやくまくと繋かかる猪木舟ちよきぶね、

店々の装飾かざりまばらに、

磴いしだたみ石いし ちらほら転る



空からぐるま、寒さむき石橋。  
 鈍にぶき眼めに頭かしらもたげて  
 黄あめうし牛うしよ、汝なはなにおもふ。

晩秋

神無月、下す浣ゑの七しち日にち、  
 病やましげに落いり日ひ黄あばみて  
 晩ばん秋しゅうの乾から風かぜ光ひり、

三十九年八月

百舌啼かず、木の葉沈まず、

空高き柿の上枝をほづえ

実はひとつ赤く落ちたり。

刹那、野を北へ人霊、せつな ひとだま

鉦うちぬ、遠く死の歌。かね

君死にき、かかる夕に。ゆふべ

あかき木の実

三十九年五月

暗き<sup>くら</sup>こころのあさあけに、  
あかき木<sup>こ</sup>の実<sup>み</sup>ぞほの見ゆる。  
しかはあれども、昼はまた  
君といふ日にわすれしか。  
暗き<sup>くら</sup>こころのゆふぐれに、  
あかき木<sup>こ</sup>の実<sup>み</sup>ぞほの見ゆる。

かへりみ

四十年十月

みかへりぬ、ふたたび、みたび、

暮れてゆく幼の歩をさなあゆみ

なに惜をしみさしもたゆたふ。

あはれ、また、野辺のべの番紅花さくらん

はやあかきにほひに満つを。

なわすれぐさ

面帕ぎぬのほひに洩もれて、

四十年十二月

その眸ひとみすすり泣くとも、——  
 空そらいろに透すきて、葉かげに  
 今日けふも咲く、なわすれの花。

わかき日の夢

水透みづすける玻璃はりのうつはに、  
 果みのひとつみづけるごとく、  
 わが夢は燃もえてひそみぬ。

四十一年五月

ひややかに、きよく、かなしく。

よひやみ

うらわかきうたびとのきみ、  
よひやみのうれひきみにも  
ほの沁むや、青みやつれて  
木のもとに、みればをみなも。  
な怨みそ。われはもくせい、

四十一年五月

ほのかなる花のさだめに、

目見<sup>まみ</sup>しらみ、うすらなやめば

あまき香<sup>か</sup>もつゆにしめりぬ。

さあれ、きみ、こひのうれひは

よひのくち、それもひととき、

かなしみてあらばありなむ、

われもまた。——月はのぼれり。

三十九年四月

たいげつ  
大月は赤くのぼれり。

あら、青む最さい愛あいびとよ。

へだてなき恋の怨言かごとは

見るが間まに朽ちてくだけぬ。

こは人か、

何らの色いろぞ、

てうらくくぐひ  
凋落の鶺鴒ぼんか、鶺鴒ぼんか。

しりへ  
後より、

れいせう  
冷笑す、あはれ、いちべつ  
瞥。

われ  
我、こころ君を殺ころしき。



## 旅情

——さすらへるミラノひとのうた。

零<sup>れいらく</sup>落<sup>やどり</sup>の宿泊はやすし。

海ちかき下層<sup>した</sup>の小部屋<sup>こべや</sup>は、

ものとなき鹹<sup>しほ</sup>の汚<sup>よ</sup>ごれに、

煤<sup>すす</sup>けつつ匂<sup>にお</sup>ふ壁紙<sup>かべがみ</sup>。

ひろしげ  
 広重の名をも思出づ。

ほどこちかき庖厨くりやのほてり、

絵草子の匂ゑさうしにまじり

物あぶる騒さわぎこもごも、

焼酎せうちうのするどき吐息といき

針はりのごと肌刺はださす夕ゆふべ。

ながむれば葉柳はやなぎつづき、

色硝子いろがらす濡ぬるる巷こうぢを、

横浜はまの子が智慧ちゑのはやさよ、

支那料理、よひの灯影ほかげに  
みだらうたあはれに歌うたふ。

ややありて月はのぼりぬ。

清らなる出窓でまどのしたを

からころと軋きしむ櫓ろの音おと。

鉄格子てつかうしひしとすがりて

黄金髪こがねがみわかきをおもふ。

数かずおほき罪つみに古ふるりぬる

初恋はつこひのうらはかなさは

かかる夜よの黒くろき波なみ間まを

舟ふなかせぎ、わたりさすらふ

わかうどが歌うたにこそきけ。

色いろふかき、ミラノのそらは

日ひ本のもとのそれと似にたれど、

ここにして摘つむによしなき

素馨ジエルソミノ、海うみのあなたに

接吻くちづけのかなしきもあり。

国くにを去さり、昨きのにわかれて

逃のがれ来し身にはあれども、

なほ遠く君をしぬべば、

ほうほう……と笛はうるみて、

いづらへか、黒くろふね船ふねきゆる。

廊らうか下かゆく重あしき足おと音。

みかへれば暗くらきひと間まに

残のこる火は血のごと赤く、

腐くされたる林檎りんごのほひ、

そことなく涙をさそふ。

## 柑子

しめ 蕭やかにこの日も暮れぬ、北国の古き旅籠屋。  
 ものあ むろり 物焙ぶる炉のほとり頸垂れ愁ひしづめば  
 さすらひくらは 漂浪の暗き山川そこはかと。——さあれ、密かに  
 やまかは 物ゆかし、わかき匂のいづこにか濡れてすずろぐ。  
 にほひ

め 女あるじは柴折り燻べ、自在鍵低くすべらし、  
 鍋かけぬ。赤ら顔して旅語る商人ふたり。  
 かたへ 傍より、笑みて静かに籠なる木の实撰りつつ、  
 かたみ

家の子は卓にならべぬ。そのなかに柑子の匂。

ああ、柑子、黄金の熱味嗅ぎつつも思ひぞいづる。  
 おそあき 晩秋の空ゆく黄雲、畑のいろ、見る眼のどかに  
 ゆふなぎ 夕風ゆふなぎの沖に帆あぐる蜜柑ぶね、暮れて入る汽笛。  
 温かき南の島の幼子が夢のかずかず。

また思ふ、柑子の店の愛想よき肥満たる主婦、  
 あるはまた顔もかなしき亭主の流す新内、  
 暮れゆけば紅き夜の灯に蒸し薫ゆる物の香のなか、  
 夕餉時、街に入り来る旅人がわかき歩みを。

さては、われ、岡の木かげに夢心地、在りし静けさ  
 忍ばれぬ。目籠擁へ、黄金摘み、袖もちらほら

鳥のごと歌ひさまよふ君ききて泣きにし日をも。――  
 ああ、耳に鈴の清しき、鳴りひびく沈黙の声音。

柴はまた音して爆ぜぬ、燃えあがる炎のわかさ。

ふと見れば、鍋の湯けぶり照り白らむ薫のなかに、  
 箸とりて笑らぐ赤ら頬、夕餉盛る主婦、家の子、  
 皆、古き喜劇のなかの姿なり。涙ながるる。

三十九年五月



## 内陣

ほのかなる香炉かうろのくゆり、

日のにほひ、燈明みあかしのかげ、——

文月ふづきのゆふべ、蒸し薫くゆる 三十三間堂さんじふさんげんだうの奥おく  
 空色そらいろしづむ内陣ないちんの闇ほのぐらき 静せいじやく寂じやくに、  
 千一せんいつたい体の観世音くわんぜおんかさなり立たす香かの古ふるび  
 いと蕭しめやかに後背こうはいのにぶき列つらねぞ白しらみたる。

いづちとも、いつとも知らに、  
かすかなる素足すあしのしめり。

そと軋きしむゆめのゆかいた  
なよらかに、はた、うすらかに。

ほのめくは髪きぬのなよびか、  
衣かの香かか、えこそわかたね。

女子をみなごの片頬かたほのしらみ  
忍いびかの息いきの香かぞする。

舞ごろも近づくなべに、

うつらかにあかる薄闇。  
うすやみ

初恋の燃ゆるためいき、  
も

帯の色、身内のほてり。  
みうち

だらりの姿おぼろかになまめき薫ゆる舞姫の  
すがた

ほのかに今したたずめば、本尊仏のうすあかり  
いま

静かなること水のごと沈みて匂ふ香のそらに、  
しづ

仰ぐともなき目見のゆめ、やはらに涙さそふ時。  
あふ  
まみ  
とき

葺<sup>いらか</sup>より 鳩<sup>はと</sup>か立ちけむ、

はたはたとゆくりなき音<sup>ね</sup>に。

ふとゆれぬ、長<sup>たけ</sup>の振袖<sup>ふりそで</sup>

かろき緋<sup>ひ</sup>のひるがへりにぞ、

ほのかなる香炉<sup>かうろ</sup>のくゆり、

日にほひ、燈明<sup>みあかし</sup>のかげ、

—

もろもろの光はもつれ、

あな、しばし、闇にちらぼふ。

四十年七月

懶き島

明けぬれどもぬるうし。つち温き土の香を

なよかぜ軟風ゆたにただたゆ懈くゆ揺り吹くなべに、

あかがねのたはれ淫の夢ゆのろのろと

ねほ寝惚れてさ醒むるさざめごと言、た起つものうし。

眺むれどもものうし、のぼる日のかげも、  
おおうなばら 大海原の空燃えて、今日けふも緩ゆるゆる  
たて縦にのみ湧わくなる雲の火のはしら  
おも重げに色もかはらねば見るもものうし。

行きぬれどもものうし、波ののたくりも、  
たゆ懈たき砂もわが悩なやみものうければぞ、  
あはうどり信あ天翁もそろもそろの吐息といきして  
ひねもす終ひ日ひうたふ挽歌もがりうたきくもものうし。

寝ねそべれどもものうし、円まろに屯たむろして

正覚坊しやうがくぼうの痴しれごこち、日を嗅かぎながら

女らとなすこともなきたはれごと、

かくて抱けど、飽あきぬれば吸あふものうし。

貪むさぼれどもものうし、椰子やしの実みの酒も、

あか裸はだかなる身の倦たるさ、酌くめども、あほれ、

懶をこたり怠をこたりの心の欲よくのものうげさ。

遠とほいかづち雷とほいかづちのとどろきも昼はものうし。

暮れぬれどもものうし、甘き髪かみの香も、

益えうなし、あるは木を擦すりて火ともすわざも。

空腹ひだるげの心は暗くらきあなぐらに

蝮はみのうねりにほひなし、入れどもうし。

ああ、なべてものうし、夜よるはくらやみの

濁うれる空に、熟うみつはり落つる実のごと

流すばる星ほし血を引き消ゆるなやましき。

一人ひとりならねど、とろにとろ、寝ねれどもうし。

## 灰色の壁

四十年十二月



灰色はいいろの暗くらき壁、見るはただ

恐おそろしき一いちめん面の壁いろの色。

臘らふげつ月の十九日、

丑うしみつ満よの夜やかたの館。

龕みづしめく唐からかね銅ひつの櫃うへの上、

燭しよく青あおうまじろがずひとつ照てる。

時ときにわれ、朦もうろう朧こくえと黒衣くろいして

天鵝びろうど絨にぶのもの鈍ゆかき床ゆかに立ち、

ひとと身てつは鉄くずの屑くず

磁じしやく石やくにか吸くはれよる。

足はいま釘つけに痺れ、かの  
 黄泉の扉はまのあたり額を圧す。

灰色の暗き壁、見るはただ

恐ろしき一面の壁の色。

暗澹と燐の火し

奈落へか虚する。

表面ただ古地図に似て煤け、

縦横にかず知れず走る罅

青やかに火光吸ひ、じめじめと

陰湿の汗うるみ冷ゆる時、

鉄てつの気きはうしろより

さかしまに髪かみを梳すく。

はと竦すくむ節ふし々ふしの凍こほる音おと。

生きたるは黒漆こくしつの瞳ひとみのみ。

灰はい色いろの暗くらき壁かべ、見るはただ

恐おそろしき一いち面めんの壁かべの色いろ。

熟視みむ、いま、あるかなき

一いつ点てんの血ちの雫しづく。

朱しゆの鈍にばみ星ほしのごと潤味うるみ帯おび

光ひかりる。聞きく、この暗くらき壁かべぶかに

くれなるの鼓つづみうつ心の臓しんざう

刻々こくこくにあきらかに熱ほてり来れ。

血けぶり。刹那せつなほと

かすかなる人の息いき。

みるがまに罅ひびはみなつやつやと

金髪きんぱつの千筋ちすぢなし、さと乱みだる。

灰色の暗き壁、見るはただ

恐ろしき一面いちめんの壁の色。

なほ熟視みつむ。……髻はうふつと

浮びいづ、女の頬ほ

なめいし  
大理石のごと腐れ、  
あふの  
仰向くや

はなひ  
鼻冷えてほの笑ふちひさき齒

うすはり  
しらしらと薄玻璃の音を立つる。

め  
眼をひらく。絶望のくるしみに

じふじく  
手はかたく十字拱み、

こび  
みだらなる媚の色

しよく  
きとばかり。燭の火の青み射し、

ぎんいろ  
銀色の夜の絹衣ひるがへる。

はひいろ  
灰色の暗き壁、  
見るはただ

おそ  
恐ろしき一面の壁の色。

『彼。』とわが憎惡心ぞうをしん

むらむらとうちふるふ。

一いつせい齊れいけつに冷血れいけつのわななきは

釘くぎつけの身を逆さかに急さかぐり刺さす。

ぎくと手は音刻おとぎぎみ、節ふしごとに

機からくり械うごのごと動うごく。いま怪あやし、

おぼえあるくらがりに

落ちちれる埴はにと鏝こて。

つと取るや、ひとつ当あて、左ひだりより

額ぬかをまづひしひしと塗ぬりつぶす。

灰色はひいろの暗き壁、見るはただ

恐ろしき一面いちめんの壁の色。

朱しゆのごとき怨念をんねんは

燃えも、われを凍らしむこほ。

刹那せつな、かの驕りおごたる眼鼻めはなども

胸かけて、生ぬるなまき埴はにの色

ひと息こゝに鋺こての手に葬はうむられ

生きながらくる苦しむか、ひくひくと

うち皺む壁ひびの罅

今、暗たかいき他界たかいより

凄きまで面おも変り、人と世を

呪のろふにか、すすりなき、うめきごる。

灰はひ色の暗くらき壁、見るはただ

恐ろしき一いち面の壁の色。

悪あく業ごふの終りをはたる

時に、ふとわれの手は

物にぎ握るかたちして見み出いださる。

ながむれば埴はにあらず、鋺こてもなし。

ただ暗おもき壁の面おも冷々ひえびえと、

うは湿しめり、一いつ点てんの血ぞ光る。



前の世さきの恋か、なほ

骨髄こつずゐに沁みわたる

この怨恨うらみ、この呪咀のろみ、まざまざと

人ひとり幻影まぼろしに殺したる。

灰色はひいろの暗くらき壁、見るはただ

恐ろしき一面いちめんの壁いろの色。

臘月らふげつの十九日じふくにち、

丑満うしみつの夜よの館やかた。

龕みづしめく唐銅からかねの櫃ひつの上うへ

燭青しよあをうまじろがずひとつ照る。

時になほ、もうろう朦朧とこくえ黒衣して  
びろうど天鵝絨のものにぶきゆか床に立ち、  
 わなわなと壁み熟視め、  
 ひとり、またせんりつ戦慄す。  
て掌ひらけばあせ汗はあななま生なまと  
 さながらににんげん人間の血のほひ。

失くしつる

三十九年十二月

失くしつる。

さはあるべくもおもはれね。

またある日には、

探しなば、なほあるごともおもはるる。

色青き真珠のたまよ。

四十一年七月

- 装幀……………石井柏
- 亭  
「エツキスリプリス」及「幼児磔殺」……………石井
- 柏亭
- 挿画『澆季』……………石井柏
- 亭
- 挿画『真昼』……………山本
- 鼎
- 私信『四十一年七月廿一日便』……………太田正
- 雄

挿画『硝子吹く家』……………石井

柏亭

屏絵及欄画十葉……………石井柏

亭

彫版……………山本

鼎



# 青空文庫情報

底本：「白秋全集 1」岩波書店

1984（昭和59）年12月5日発行

底本の親本：「邪宗門」易風社

1909（明治42）年3月15日発行

入力：kompass

校正：今井忠夫

2003年11月24日作成

2005年10月24日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。



# 邪宗門

北原白秋

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>